

針葉樹会報

第 126 号
2013 年 2 月



目次

特集	
付表／日江井正巳山行譜	追跡「一橋山岳部の軌跡」
「針葉樹」と山日記から	前穂高東面を巡つて
付表／十合健二山行譜	日江井正巳自叙伝および山日記から
倉知 敬	倉知 敬

会務報告	夜叉神峠周回路の記念山行	竹中 邦
90周年記念事業実施報告	インド ヒマチャルプラデシュ・ヒマラヤの旅	佐藤 久尚
新年会への会員近況はがき	「山恋しくて鳳凰三山」 —昔、山ガールが作った歌	上原 利夫
台北での講演	週末山小屋生活のすすめ	佐藤 活朗
三月会通信		中村 保
編集後記		

表紙写真説明 II 1964年1月5日、奥又白池少し下方の奥又白池より望む前穂高東壁(左)と四峰正面壁(右)からのスケッチ面壁参照

52 48 47 43 41 41

針葉樹会報
第 126 号

発行日 2013 年 2 月 28 日

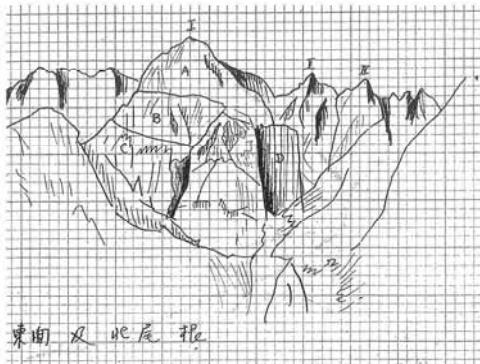
発行者 針葉樹会
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷株

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事／小島和人、倉知 敬
井草長雄、川名真理



日江井さんアルバムより（自伝年譜には1937年／20歳、12月骨折、入院生活6ヶ月左腕屈曲不全のまま……とある）



山日記1936に描かれた前穂東壁スケッチ
(表紙参照)

8.1 畳又自米幕生活 (8.1-8.3)

8.2 暖房生活

今日、暖房の火が少々弱くなりお湯が止まつた。朝起きた後はまだ少し温かいが、朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。

8.3 雪中生活

田舎の日記は、雪の中でも暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。朝食後は暖房の火を止めて、窓を開けて換気する。

8.4 8月9日、山行記録

8月9日、山行記録

8月9日、山行記録

8月9日、山行記録



1970年9月荒沢岳頂上にて、53歳の日江井さん（左端）

山日記1937より（本文山行譜・同年8月9日参照。山日記にはこのような詳しい記述が延々と続く）

特集——追跡「一橋山岳部の軌跡」

前穂高東面を巡って一日江井正巳自叙伝および山日記から

倉 知 敬（昭和38年卒）

おきたいからだつたと言う、山日記には（一部ではあるが）重要な山行の率直な紀行記を丹念に書き連ねている。普通ここまで書き記す人はそう居ないのであるが、どう生きたかという証しを遺すのは、人間として実に大切なことではないだろうか。

1. はじめに
2. 前穂高東壁への道
3. 『正和茫茫』から一日江井さんの一橋山岳部時代
4. 本稿のまとめとして
付表・山行譜—「針葉樹」と山日記から

この二つの資料を基に、一橋山岳部の活動と日江井さんの人生が交錯するところ、また登山についての思索や心境を書き出してみたい。その登山活動は積雪期の前穂高東壁登攀に繋がつて行く修練の道筋でもあり、大学山岳部の活動の原型でもある。『針葉樹会報』には、日江井さんの追悼としてわずかに深谷さんが数行述べたものがあるだけで（九七号二頁）、同じ時期の仲間たちが先に物故した方々の場合は書き手が居ないので追悼記もおざなりになる例に洩れなかつたのであるが、ここに真に適切な資料が出てきたわけなので、本稿は遅れた追悼記としての意味もあるものと考へて頂きたい。

1. はじめに

日江井正巳さん（昭和十六年卒、一九一七～一〇〇一）は、自叙伝『正和茫茫』（一九九三年刊、自家版）を書き遺されており、また大学予科時代だけだが紀文を書き記した山日記（一九三五、三六、三七）三冊を遺されている。縁あってご遺族のご好意からそれを知り、興味深く読ませていただいたのであるが、戦前の一橋山岳部全盛期の一翼を担つた日江井さんの足跡を偲び、会報119号「一橋山岳部の軌跡」の余話ともいいうべきものとして、以下に少し角度を変えて見た一橋の歴史の一環を紹介したいと思う。

自叙伝はA5版二二八頁にわたり、生い立ちからシベリア抑留体験までの半生記を、ぎつしり書き込んであり（執筆の動機は家族に知らせて

2. 前穂高東壁への道

日江井さんは、一九三五年東京商科大学予科入学とともに一橋山岳部に入り、一九三七年末の奥又白冬合宿で雪崩遭難するまでの予科三年間に集中的に登山活動を続けた。主な登山はほとんどその三年足らずの短期間に集約されるのが、それはほぼ一橋山岳部の全盛期に重なつている。しかし、充実した山岳部活動の中で育ち、やがてその最先端を行く登攀を担うところまできた矢先に、事故で挫折するという、まことに劇的というか、自身にとつては悲劇的山歴を体験した人である。

山岳部入部同期生には大塚武さんという人が在り、この年次の主要部員は日江井・大塚の二人であつて、日江井さんは当初から頻繁に大塚さんと一緒に山に出掛けている。最初の本格的登攀を試みた甲斐駒・摩利

支天南壁もこの二人での企てであり、運命の分れ目となつた奥又白・松高ルンゼの雪崩遭遇でも一緒だつた。

この頃の山岳部を本格的登攀集団へとリードした人は、何といつてもまず小谷部さんだが、その登攀路線を受け継いでいったのは、森川、大塚、山田、という続く年次の部員たちである。しかし、運命が順調だったならば、それは森川→日江井及び大塚→山田、ということになつていたはずだ。つまり、小谷部さんによきパートナーとなつた次学年の森川さんが、自らリードする立場となつた時パートナーとして多分最も期待したのが、次々学年の日江井さんだと推測される。

一橋山岳部が初めてヒマラヤ登山のレベルを念頭に極地法合宿を実施し、北岳バットレスの冬季未踏岩壁登攀に成功したのが一九三六〇三七年年末年始の十八日間。日江井さんは大塚さんと共にサポート隊員として参加（望月さんも加え三人で）、小谷部・森川パートィが初登攀をするのを目の当たりにした。

次の一九三七〇八年冬季合宿で目指したのが、前穂高東壁の冬季初登攀（同時に四峰正面壁登攀も予定か）である。その直前の三七年八月

と十月に、森川・日江井パートィは二度無雪期の東壁を登攀した。当然ながら直後の冬の合宿では、この二人で東壁を目指すのが所定の計画となつていたと思われる。

三七年十月には小谷部・大塚パートィも東壁を登攀した。しかしこのパーティの主眼は四峰正面壁であり、この時東壁と共にこれをトレースした。多分このパーティで冬には四峰正面壁登攀を考えていたに違ひない。

前年の北岳冬季合宿が参加者わずか五人だつたのに対し、この年の冬季合宿は総員一四人、相当の態勢と意気込みに溢れていたことだろう。しかしこの冬季合宿の目論見は、入山時の雪崩遭遇・日江井骨折で著しく狂つた。僅かに、悪天をついて小谷部・森川パーティが東壁下まで達

しただけで引き返し、敗退した。もし斯く歯車が狂わなかつたら、小谷部・大塚、森川・日江井、の二パーティは、前穂高東壁と四峰正面壁に分かれ取り組んでいたに違ひなく、それは正に一橋山岳部始まつて以来のクライマックスだつたろう。（実際には、一九三八年三月に再挑戦した森川・船本パーティが東壁初登攀を果したが、二人とも凍傷を負う。また、一橋山岳部による次の冬季初登攀の実現は、一九三九年十二月の大塚・山田パーティによる穂高・滝谷第4尾根となる。）

この遭難事故以降の本科での三年間、日江井さんは時々登る程度で、もはや実質的に山岳部の活動には参画していない。その間のリーダーシップは明らかに大塚さんが執つたと言えるが、それは『針葉樹』十号の主要記事が主に大塚さんの筆によるものであることに象徴的に表れている。（その巻頭記事「前穂高東面に就いて」に登攀全般の報告が集約されているが、それに準じた表題を付けた本稿は報告別編というべき位置付けにある、と考えてまとめたつもりだ。運命のいたずらで表面から消えたが、その頃の一橋山岳部を支えた一員としての日江井さんの存在を忘れてはいけない。）

早くから小谷部さんら上級部員の高度な登攀のサポートに挺身し（登山開始二年目のことだ）、直ぐにも甲斐駒摩利支天南壁や奥又白の岩場といつた未だ開拓期にある岩壁に挑戦するなど（三年目にして）、日江井さんは身体能力高い登攀者としての才能を發揮するのだが、同時に山日記の記述から汲み取れるのは、高山の自然に魅了される纖細な感性を持ち、登る歓びを心から堪能する気持ちなど、本来登山者として最も本源的にあるべきものを当初から備えていた人であつたことだろう。不慮の怪我もさることながら、当時の社会情勢に翻弄され、家庭環境にも左右された気配でもあり、天性の本能を貫徹する運命には恵まれずに終わることになった。

以上の日江井さんの登山歴論評の原典、日江井正巳山行譜を、付表と

して稿末に掲載したい。個々の登行ルートや同行者などの詳細は除き、山行単位の概要を列記する簡単な表とした。編纂の資料は、三冊の山日記、『針葉樹』九、十号、戦後の部は『針葉樹会報』である。

予科三年間の凝縮したこの登山歴は、修練に意欲を燃やす山岳部員たるものとの行動そのものであり、短期間に積雪期登攀までを視野に入れた過程を踏んでいる。重要なステップとなつた山行については、山日記の手記を挿入して、登山にどう取り組んだかという主観的な表現などを引用した。

3.『正和茫茫』から—日江井さんの一橋山岳部時代

自叙伝『正和茫茫』には、登山活動について述べた部分は「山に没入し挫折するまで」と題した一章五頁余（全体で四〇章ある内）にほぼ集約されており、日江井さんの人生における登山の重みはそこに収斂されている。次の章は「東京商科大学学部の頃」と題し、高瀬ゼミのこと、中小企業論を専攻し将来の道を選んだこと、などの人生への展望といった基調の傍ら、関節の複雑骨折で腕が元通りにならず「既に岩登りは諦めていたが、山の魅力は忘れられず、奥秩父の峰を歩き始める」という心境にあり、それなりに山岳部と関わり続けた顛末が語られる。

そもそもこの自叙伝は、家族に伝える目的で書かれたのであり、登山のことは内面的なものとして簡単に触れているだけだが、実は心に占める存在としては大きかった、と思われる。書かれている内容は、山岳部の有り様などに及び、筆の向け先は家族に伝えようとしているよりも、自分の心を表現しておこうといった意図を感じさせるのである。

家族へのメッセージであるものを対外的に発表するのは、日江井さんの意向に反することにはなるが、しかしこれらの章に書かれたことは客

山に没入し挫折するまで

予科一年秋の鳳凰三山縦走以来鬱積していたものが弾けた様に山にめり込む様になつた。二年の時は八ヶ岳、富士山、岩殿山、穗高涸沢生活、南アルプス白峯三山縦走、甲斐駒、仙丈、奥秩父、北岳バットレスサポート及間の岳、其の他低山へ。

夏の涸沢では先輩に岩登りの基本、雪渓上のグリセードを中心とするピッケルテクニックを教育され、山の魅力に次第にとり憑かれる。

冬の北岳では輪樋をはいての歩行、ラッセル等のポイントを伝授される。寒さへの習熟（後年左満時に役立つた）、冬期天幕生活の貴重な体験、寒い朝のダイヤモンドダストを見ての感激等、夏冬夫々に初心者の私は強烈な印象を植え付けられた。「筆者註」四半世紀後筆者たちが前期学年時代に山岳部で体験したことはこれと全く同じこと、この頃から山岳部の訓練体系は出来上つていたのである。しかしその後の展開への飛躍が比較にならぬほど物凄いものだったのには驚かされる。」

予科三年になるともう初心者ではなくなる。部の活動目標に協力するように山行もその線で行われる様になつた。当時大学の山岳部では初登攀競争も終末に近く、所謂登る所が無いといわれていた。東商大はこの

観的に見てもっと広く伝えていいことに違いなく、筆者としてはためらわず、この章に限り紹介しても日江井さんは異存ないだろうと確信する。全盛期とも言えた頃の一橋山岳部も、必ずしも全てが美化されるようなものでは有り得ず、渦中の人の立場から山岳部の本質に触れた率直な見方を知るのは意味深いことだ。そういうわけで、以下に「山に没入……」の章全文と、「……学部の頃」の一部抜粋を引用したい。

風潮に反撥するように所謂ヴァリエーションルートを探索しては登る一種の異端児だった。當時目指していた北岳バットレスも予科二年サポー卜した時に先輩が完登し、登山史に輝かしい一ページを加えた。次の目標は前穂高の東壁と北尾根四峰フェイスだった。

予科三年になつて気がついたら同級生は〇「筆者註」大塚武の頭文字。自己の行為表現が目的だから他人は匿名扱いで、という配慮だが、私たちには誰なのか自明のことだから明確に、以下初出時に氏名注釈付き、以降は実名表記したい。」と二人だけになつていた。大塚と僕も比較的に山行についてはある程度同じ考え方を持っていた関係からか、学部三年の〇氏「小谷部全助」、二年のM氏「森川真三郎」のパートナーとして、僕等二人がなるような組合せが出来てしまつた。これが明瞭に決定したのは昭和十二年夏剣沢合宿後全部員で上高地迄大縦走をやり、若干の休息後奥又白谷から前穂高東壁と四峰のフェイスの登攀を終えた時点である。この時は未だ特にリーダーたる小谷部氏から言われたわけではなかつた。

この後十月下旬奥又白谷行にて、小谷部氏と大塚が四峰フェイスを、森川氏と私が前穂高東壁をと、登高目標が決定し、仕上げの意味で十二月上旬富士山六合目にて雪中設営の訓練をやつた。尚、部としての冬の計画はスキー合宿はせず、新人部員を含め全員穂高に集中し、徳沢小舎を根拠地に登攀要員以外はスキー登山をする様になつた。

昭和十二年十二月中旬、先発隊の一員として穂高に出発。翌日島々から沢渡まで自動車を利用、沢度から中の湯まで徒歩、途中からスキーをつける。かなりトレイニングをやつた筈だが、冬山の荷物はやはり重い。今日は中の湯で泊まりと決まつてるのでゆっくり歩む。山吹トンネルの入り口に丁度休み場所があり一休み。トンネルに入つてほんの數十メートル激しい空気の衝撃を感じ振り返ると、今迄休んでいた所を表層雪崩が通つた跡、危ない一瞬を避けてほつとする。中の湯から上は、産屋沢ま

で雪崩の心配はあつたが無事に通過し、後は徳沢迄平地同様で、静かな上高地にスキーを滑らせる。天候は荒れ氣味で、徳沢へ到着した時は雪まみれであつた。

この日、夜おそく迄風は止まず、翌朝起きた時、風は風いでいたが雪は依然降つていて、徳沢小舎の爺さんは山行を止めたが、松高ルンゼ入り口まで荷上をして置こうといつてスキーをつける。梓川の河原はやはり風があり地吹雪である。奥又白谷の出合に入る。松高ルンゼ入り口迄一登り。ひとまず休憩。ルンゼを覗くも割合平穏。雪崩の気配もない。「折角此処迄来たんだ。登っちゃおう」誰言うではなく、腰をあげ、スキーセットをデボしてしまつた。五人は黙々と先頭のラッセルの跡に続く。新雪のため輪標をつけていても相当潜る。何回か先頭を交代する。

と突然何かに突き飛ばされ、投げ出され、丸太の上を転がされている様な感じをうける。すると呼吸が苦しくなる。回りが静かになつたようだ。どの位時間が経過したのだろうか、ほんの束の間の事ではないか。いや大分前かも知れない。俺達は雪崩にやられたのだ。立ち上がりようとしても足が痛い。でも何とか歩ける。腕は左が自由にならない。一人見えないが四人は雪の上に出てゐる。一人を捜し出すのに随分時間が掛かる。漸く手袋を見付け、掘り出し活を入れる。五人の状況を確認して小舎へ戻る。ああこれで今年の山も終わりか。左腕が単なる打撲傷であるように祈り乍ら重い痛む足を運ぶ。

其の夜は痛みにうなされ、翌朝腕は丸太のように腫れ上がつてしまつた。とりあえず急造の添木に腕を縛り、中の湯迄行き、当日到着予定の本隊に合流し、善後策を講じて貰わねばならない。一步踏み出す毎に膝の痛みがひびく。釜トンネルを漸くの思いで抜け、中の湯に着く。後発本隊の隊長には眞実を伝え、一般部員にはスキー練習で負傷した事にする。

翌日、本隊と別れ、小谷部氏に付き添われ、暗澹たる気持ちを抱いて

沢渡まで漸く下り、タクシーにて松本へ。病院でレントゲン検査の結果、左上脇部骨折、同肘関節骨折、両足は打撲との診断を受け、直ちに東京へむかう、列車内の侘しかつたこと。突然の帰京、それも怪我に家人は吃驚。駿河台名倉病院に入院する。精密検査の結果、複雑骨折の為手術のほうが早いという話だったが、牽引療法で様子を見る（約3ヶ月）事になった。

山岳部のほうはこの事故で奥又白登攀は中止、スキー練習のみに切り替えた。一方私は予科三年なので学部進学の判定テストになる後期の試験を受けねばならぬ所、先輩の奔走によつて、特に前期の成績の悪かつた商業算術のみ後期に受験すれば他学科はテストを免除するという予科当局から許可を取り付け、三月一科目のみ受験し、無事学部に進学できた。

しかし牽引療法は結局失敗。止むなく外科手術に切り換え、今度はギブスで固定、五月漸く之を外し、マッサージ約一ヶ月後七月退院。温泉にて約一ヶ月リハビリを行う。結局夏の終わる八月まで長期欠席をし、折角加入を許可された高瀬先生のゼミに御迷惑をかけてしまつた。

このように私の激しい山行は挫折したが、熱病のよう山に傾倒していつた予科三年になつた時にふと、こんな山登りの態度で良いのかな、山に登りだした頃の山に対する畏敬の念は何處へいつてしまつたのだろう、アルピニズムの何なのは判らないが唯山が好きで登つてゐる。山が与えてくれる如何なる苦しい試練にも挫けないし、そのような苦痛は一種の麻薬のように陶酔境に誘う。

しかし一方、秩父や南アルプスの原生林やお花畑には、自然に対する

畏敬と心の安らぎを覚える。こういつた山に対する初心を忘れてしまつたことが、この奥又白の雪崩事故に繋がつてゐるのではないか、と思うようになつた。

誰も通つたことのない岩尾根、人の触れたことがない岩角に、只憧憬

れるだけで山へ登つてゐたのではないか。山が好きだということは、激しい山登りとハイキング的山登りの何れでも同じと思うが、この二つの間には妥協し難い溝がある。今迄の私は、あまり深い考へなしに両者の間を揺れ動き乍ら山に登つてゐたといえるだろう。

その頃の山岳部の一部の部員の間には「只山が好きなだけなのは山岳部員ではない」という様な空氣があつたのは事実である。私たちの同学年は最初は大量の部員を抱えていたが、予科三年の頃にはこの空気を嫌つてか、大半はやめて、大塚と私の二人だけになつてしまつた。大塚とは其の頃の山行の考へはある程度同じだつたが、前穂の東壁登攀メンバーになろうとは思わなかつた。この時点では技術的にも体力的にも無理であることを理由に辞退すべきだつた。

昭和十二年の秋、初雪をみる頃、最後の試登をやつた折、ルートの取り方が悪く、一晩岩壁途中で夜を明かした。この時、何か将来山岳部に重大な事が起りそうな予感がした。大きな力に押されて止むなく走り出すような感じである。事実それから一ヶ月後に雪崩事故、十三年三月最後の力を振り絞つて挑んだ東壁に辛くも勝利を納めたが、凍傷という手痛い打撃を受け「森川、船本、東壁初登攀後足指など凍傷を受く。森川、右足指全部殆ど付根より切断。船本、右足指全部付根近くより及び右手薬指第一関節より切断、また内臓器官の衰弱で一時重態。両名六月退院」、更には十五年夏、新人丁君「友田純一、越中沢岳縦走中に滑落死」遭難、十六年十月奥秩父遭難「前田道夫、長沼広次、古沢幸平、甲武信岳東沢疲労凍死」と、張りつめていた糸の緊張が切れてしまつたような山岳部だつた。

何故だつたのだろうか。よく考えて見ると、結局私たちはアルピニズムに未熟だつたの一語に尽きると思う。小谷部氏といえば今だに学生時代の輝かしい活躍の記録を持つ超人として岳人仲間でも有名な先輩だが、あの当時の小谷部氏のように傑出したクライマーに比する後輩が

育つていなかつたといえると思う。

十二年夏剣沢から上高地への大縦走後、数日を経て奥又白に遊び、冬の目標を前穂東壁に決めた際、小谷部・大塚隊と森川・日江井隊の技量の差は歴然としていた。小谷部・大塚隊は第一日の四峰フェイス、第二日の東壁を苦もなく完登したのにに対し、森川・日江井隊の第一日の東壁は悪戦苦闘の末漸く完登したもの、第二日の四峰フェイスはルートを間違えて引き返している。秋の試登には、森川・日江井隊は遂に途中ビバークの上完登している。このように記録を見てもかなり技術的に差があると思う。幽明境を異にしている森川氏を兎角いうのは避けたいが、小谷部氏のような偉大なクライマーとザイルバーを組めば難度の高い岩場でも完登出来るので、自分の技量を過信してしまうのではないか。

そこに森川氏の躊躇のものが有つたのではないだろうか。

翌十三年春、何でも登るという意気込みに燃え、一応完登はしたものその後遺症を負う人間を作つてしまつて、山岳部は深い傷跡を残した。もし十二年冬の雪崩事故が無ければ私が当然パーティの一員となつていたわけで、言い方は悪いが私の身代りとなつてくれたF氏「船本文治氏」には申し訳ないと思つてゐる。

かくして私の山行は中絶し、再び登り出した学部二年からは歩くだけの山行になつてしまつたが、登高意欲というか山への思いは事故前と同じであつた。

「」とし、十四年九月に刊行した。この間原稿の執筆、広告とり、校正等先輩の指導を仰ぎ乍ら仕事を進める。すべて素人がやるので、仲々気骨が折れるが、少しづつ自分達の本が形をなして行くのは楽しいことだつた。ただ前九号と比較すると印刷、紙質、写真製版に数等の見劣りが感ぜられ致し方無いとしても淋しい思いをした。十号完成については先輩からその労を犒つてくれて面目を施すことが出来たが、一部の先輩部員の中に先鋭的な部の行動に批判的な人々もいて、複雑な気持ちだつた。それはこの十号が遭難を主体とした報告に終わつて、読む人にやり切れない、暗い印象を与えた為だつたと思う。

(中略)

腕を雪崩で骨折して以来、神経を多少痛めたらしく、左の腕力が極端に落ち、岩登りに自信を喪失していたが、学部二年の夏の合宿時滝谷第一尾根を登攀した折、つくづく腕力の衰えを痛感し、少し山への情熱も醒めつつあつたのだろう。学部三年の夏は体も調子悪く合宿にも参加せず、私の所を夏山留守本部にして置いた。

部の本年の計画は針ノ木—薬師—双六—槍の縦走で、七月中旬出発した。出発後三日目と思つたが「トモダソウナシス」「トモダキトク」の二通の電報が相次いで入る。発信局は「エツチユウオミ」とある。先輩に直ちに連絡をとり、善後策の協議中「トモダキトクタヤマオンセン」の電文が入り、予定を変更。私は横浜友田宅へ。先輩には在京の部員に通知、応援を頼まれた場合行ける様待機させる事に決定。

友田家ではすぐ現地へも行きたいとのこと。恐らく立山温泉まで下ろしたらしい。夜行列車で再会を約し、上野駅より現地へ。翌朝富山着。電鉄にて小見着。(中略)砂防工事用のトロッコ道路……を歩くわけである。暑い日中、父上は未だしも母上は良く歩かれた。列車中父上が一橋がて立山温泉が見えて來た。どうか生きていて欲しいとの願いも空しく、

東京商科大学学部の頃（抜粋）

(前略)

学部二年は勉強もしたけれど、山にも適当に出掛けた。(中略)この頃山岳部は機關誌『針葉樹』第十号の発刊の準備をしていた。十号は前穂高岳東壁の記事を中心として、遭難の報告も兼ねて「反省と新しき出發

友田君は既に事切れていた。地元の警察からも来ていて検屍も終わっていた。気丈な御両親は涙も見せずに我が子と対面され、……その日は部員交代で火葬の火を絶やさない様にした。

(中略)

七七忌に追悼会をやつた折、父上が息子の死を無駄にしないで欲しいと挨拶されたのを今も思い出す。それまで遭難ということは雪崩事故それに続く凍傷事故以外ではなく、人命に関わる遭難事故の無いことを誇りにしていた一橋山岳部が、友田先輩の願いを裏切るかのように又十六年十月の奥秩父東沢遭難事件を起こしている。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

4. 本稿のまとめとして

日江井さんの以上の手記と行動記録が語るもの意義とは何だろうかと考えると、それは次の二つのことに集約されるのではないかと思う。

一つには、主に『針葉樹』各巻に載せられている一橋山岳部の嚇々たる初登攀記録に関して、はじめて率直に批判的な言論が表現されているのが発見されたことだ。勿論『針葉樹』自体にも、反省の弁があれこれ冷静に述べられており、一方日江井論はもともと公表する目的で書かれたものでないでの、このように決めつけるのは妥当でないかも知れないが、少なくとも筆者には確かにその様な新鮮な響きを齎したものだった。

天才的小谷部さんの偉業に触発されて（天才とは他人の常識の枠を超えて発想し、生来の力倅を發揮する者である）、明らかに技術的に劣る後輩たちが実力を錯覚して事故を招いた、という明確な原因を指摘している。同じ岩場を登るに倍の時間が掛かつたなどという厳然たる事実が

等閑視され、集団としての高揚した心理状態に麻痺して事が進んだところに問題があつた、としているわけで明解である。ここにこういう資料もあることを発表しておくのも意味あることと思うのだ。

もう一つは、人間はその生きた証しを、どういう形であれ書き遺していくべきではないか、という実践的な教えである。日江井さんは青春の情熱を傾けて登山活動を続けたが、途中で挫折せざるを得なかつた。しかしその記録はしっかりと正統的な道筋を辿つたことを示しており、またその心情は山の齋す世界に魅せられて情感を研ぎ澄ます充実したものでもあつた。登山はそういうものであつたが、さらに学業、仕事、戦役、家族、晩年、と記述は及び、登山に対すると同じ様に真剣に人生を送られてきたのもわかる。

実は自叙伝を通して一番筆を走らせていて、つまり叙述に長いページを費やしているのは、シベリア抑留の体験である。この時代の人々にとって、戦争体験は最も深く自己を投入しなければならない人生の部分だつたのを、日江井さんも告白しておられるのだ。また、かなりの筆先を、闘病の顛末にも向けられている。それらは、ここで紹介する類のものではないが、そうした人生体験の陰影の中に位置づけされた登山だつたわけで、それに接するのは、いわば人生の中の登山として記録を読むことに他ならないのである。

(註記・自叙伝表題『正和茫々』は、正は大正の正、和は昭和の和、茫は漠漠たるよしなじ)と、の意を表している由です。なお、自伝文引用については、事前に本稿をご遺族に提示し、発表のご了解を得ている。

付表：日江井正巳山行譜 ——「針葉樹」と山日記から

昭和 10 年 (1935) 予科 1 年 18 歳

- 4月 <小仏峠、景信山> 浅川一小仏峠—景信山—與瀬
- 5月 <谷川岳> 新入部員歓迎山行、前夜夜行発、土合—西黒沢—西黒尾根—頂上一天神峠—谷川温泉
- 7月 <燕岳—槍ヶ岳、前穂高、上高地天幕生活> 燕槍縦走A班に参加、有明—中房—燕岳—大天井—殺生小屋—槍ヶ岳—上高地入幕、焼岳往復、岳沢より前穂高往復
- 10月 <鳳凰山> 萩崎—青木鉱泉—ドンドコ沢—北御室小屋、地蔵岳往復
(註：一行の内、森川真三郎、柿原謙一、オベリスク登攀を試みるも、森川スリップ負傷、一行は大樺小屋行きの予定を中止する。一方、別隊の村尾金二、小林重吉、広河原小屋より下山して合流、森川を人夫が背負い一行下山。尚、この別隊は北岳バットレス登攀のため入山、10月30日、村尾、小林、望月達夫パーティが第4尾根初登攀、11月1日小谷部全助、望月が第5尾根を登攀している。)

昭和 11 年 (1936) 予科 2 年 19 歳

- 3月 <野沢温泉スキーコ合宿>
- 5月 <富士山> 富士吉田—5合目小屋—頂上—吉田大沢—小屋—吉田
- 6月 <丹沢蛭ヶ岳—大山> 與瀬—焼山—蛭ヶ岳—丹沢山—札掛—大山—伊勢原
- 7月 <穂高涸沢合宿> 島々—徳本峠—徳澤小屋—涸沢池の平
(山日記より)

ジャンダルム飛騨尾根 (同行：森川、大塚)：ロバの耳の所で相当寒気を催した。しかし何ら危険な事おこらず無事ジャンに到着、ここから〈飛騨尾根を〉出来るだけ下まで降りる事にする。岩は Sound でとても気持がよい。ザイルなしで第2テラスまで下る。森川氏一人第3テラスまで行く。

前穂高北尾根 (小谷部、大塚、斎藤)：快晴で気持が良い。天幕のすぐ後から、岳樺、這松等ゴソゴソ別けて登る。7・8の間に出来ると徳沢方面が良く見える。4・5の間まで依然として這松を泳ぐ。…4峰のあたりからアンザイレン、リッジ通り登る。スケ、日、斎、大の順である。4峰の上から見た3峰の壁、すこし我々を圧倒する。しかし案外カモいので安心してしまう。

天狗岩往復 (大塚、斎藤) 西穂高沢右俣—西穂稜線一天狗岩の頭一天狗沢：西穂に登らんと張切って5時頃出る。3人して岳川の暗い林のなかをモソモソと歩く。やがて河童橋から見える白いザレの所に出て、それをトラバースして西穂に取付く。斎藤はタビハダシで雪渓は登れず、残念ながら引返す。稜線に出て西穂を見ると(案外遠く悪そうな岩稜で一大塚記)手が出ないので、仕方なしに天狗岩に登る事にする。逆層なので随分苦労したが、なんともなく済んだ。天狗岩の上で1時間半もノビ、ジャンや笠・錫杖を眺め、焼の噴煙を嗅ぎながら下る。雪渓のグリセードは気持がよかつた。

- 8月 <箱根神山、明星山>
- 9月 <北岳大樺沢合宿、白根三山縦走> 萩崎—青木鉱泉—北御室小屋—高峯—白鳳峠—広河原

小屋一大権小屋、釣尾根鞍部から北岳往復、バットレス第5尾根登攀、一間ノ岳—農鳥岳—大門沢小屋—西山温泉—足馴峠—出頂ノ茶屋—鰍沢—甲府

(山日記より)

第5尾根登攀 (望月、大塚) : またまた快晴であった。今日は Buttress を登攀する日だ。5時半ごろ暗い中でモソモソ沢を登る。岩場下で休む。これから、日、大、望は第5、スケ、森は第4を登る事にする。第5は下が悪い。ルンゼから尾根へ出る所など下を見ると肝が冷える位だ。上は割合に楽だ。しかしこの素晴らしい岩壁はすごい…ただ圧倒されるのみである。頂上で大分待ってスケさん達が来る。)

〈註：この合宿で、小谷部、森川パーティは、第4尾根、第1尾根（初登）を登った。

この頃は甲府まで歩いて帰っている。針葉樹9号には「山の帰へりに豊年の田畠の間を縫ってくるのは、全く嬉しい事だ。行きづりの百姓の顔までが輝いて見える。甲府で小谷部、森川と落合ひ共に帰京。」(望月記) とある。)

10月 <奥秩父> 塩山—雲峰寺山門—柳沢峠—高橋川奥の杣小屋—落合—多摩川を下る—冰川

10-11月 <甲斐駒、鋸、仙丈> 日野春—横手—駒ヶ岳神社—笛平—屏風小屋

—七丈小屋—甲斐駒ヶ岳—六合目小屋、鋸岳第一高点まで往復、一八丁坂—北沢峠—長衛小屋、仙丈峠往復、仙水峠往復—北沢峠—戸台—黒河内—伊那入船町

11月 <富士山> 富士吉田—5合目小屋—テント（一人で後発、望月らと合流）—屏風尾根漏斗状下端—尾根上7合4勾同高点—天幕—吉田へ下山

(山日記より)

屏風尾根登攀 (望月、大塚) : カンちゃんが80米ばかりスリップしてすぐ止った。なかなか氷が張って居ると面白く登れる。…ツアッケはよくきいて快い音をたてる。…富士山はいつ行って見ても気持が良い。

〈註：針葉樹9号（望月記）には、「此の行は北岳のトレーニングの目的にて」行ったとあり、次の冬期バットレス初登攀行のサポート部隊が参加、「一度は都合で来られぬと云った日江井来る。意気ほむべし」とある。〉

12月-1月 <北岳、間ノ岳> (バットレス登攀隊サポート、望月、大塚、日江井—先発、登攀隊は小谷部、森川—後発)

(山日記より) 以下、日誌を引用する。

12.24 先発隊、前夜発、甲府一大曾利青木方—夜叉神峠まで荷上げ往復

森川氏見送り。助さんの足もなおって何よりと思ふ。甲府はまだねむっている。自動車に沢山つみこんで芦安にむかう。…今日、夜叉神まで荷上げと決まる。皆村の人はおどろきの目を見張る。夜叉神の炭焼き小屋に荷をたくし、峠に立てば三山が白銀に輝いて、今までのうさも晴れる。

25 青木方—夜叉神峠—鮎差—蝮平小屋

今日はさて蝮平までだ。人夫たちのおせいのには閉口する。野呂川は全く冬の姿で僕を迎えた。雪を頭からかぶって進む。)

26 一池山釣尾根を登る—急坂の上、人夫帰し荷物組換え—池、幕営

小屋すぐ後の急坂を攀じ登る。とても荷があるのでへばった。…池近くで人夫たちは帰へると云ひだったので、仕方なしに荷は急坂の上に置き、金をやってかへす。ここから

-
- 輪かんをつけて林間を進み、池のそばに天幕を張る。…夜は -20° に下りおどろいた。
池の面全体はシベリヤの雪原のように月が照らして凄しい様子を思はせる。)
- 27 置いて来た荷物を天幕へ荷上げ
一日荷上げ、下ったり上ったり3往復する。天気があまりよくて、少々おそろしくなる。
農鳥が林間にチラチラ白銀の山肌をあらわしている。)
- 28 一亡魂沢頭—北岳頂上—亡魂沢頭—天幕
相変晴れている。カンちゃんは昨日から徹夜して食物を作ってくれる。有りがたい。
いつも乍ら靴はカチカチに凍ってしまうので仕様がない。どうやら4時すこしすぎには、
タンネの林の中をランタンの光を頼りに雪の中ボコボコ登っていた。雪が相当ふかくて
おまけに道があまりよくなないので実際なきたくなるやうだ。やがて砂払辺りまでくると
日は割合高くなった。岩のかげで間ノ岳、農鳥を賞す。稜線へ出た時、眼前にながめた
北岳の勇姿は終生忘れる事ができぬ位すばらしいものであった。
中央稜の濃い影が北岳の血脉のやうに胸の上をはっている。天気はよい。
八本歯も何ら苦労なく通過して主稜に取付く頃には1時頃だった。強い風をよけながら
頂に立った。なんという感激であらう、ただうれしかった。すばらしい眺望、仙丈、地
蔵、駒などの前衛の山山が北岳の存在を大にしているのだ。しかし一分の余裕を持たず
に我々は退却しなければならなかつた、風はあまりにも強かつた。
砂払の下では今日の緊張は一時に抜けたやうになった。暗くなった林の中をフラフラと
夢心地で歩いた。池のふちでヤホーをいふと、たしかにきこえる、スケさんとカワさん
が来ている。久し振りに会って楽しい山の話をする。天幕はせますぎる位であった。
- 29 小谷部、森川は亡魂沢頭まで荷上げ、望月、日江井は休養、大塚は下山。
- 30 全員で2950米の頭に第2天幕設営、途中残した荷物を取りに行き、7時半ごろ天幕に戻
る。
- 31 及び1.1 終日吹雪、滞在
- 2 小谷部、森川、第1尾根積雪期初登攀す。望月、日江井、間ノ岳往復。
今日もあまり〈天気が〉よくないが、仕方なしに間ノ岳をめざす。…稜線はとても風が
強く飛ばされそうなので、荒川側を行くことにする。中白根のあたりから北岳を見ると
断然すごく見える。間ノ岳は案外たやすく登れたが、結氷は相当緊張を要した。農へ行
かんとしたが、カンちゃんの具合がよくないので残念乍ら引き返す事にした。
- 3 小谷部、森川、休養。望月、日江井、下山、蝮平小屋泊
第1天幕を過ぎ、無事蝮平小屋に到着して、やっと山行が終った事を喜ぶ事にした。お
かずのない米をたいて食った時には、地上にもこんなうまいものがあるのかと驚きの目
を見張った程であった。ともかくうまかったことは事実。天気はよくなつた。この荒川
の暗い谷間を月が照らす頃、僕は快い寝息を立てていた。
- 4 甲府へ下山
夜叉神の登りは長いので閉口、大曾利で成功を祈つてから、甲府丸茂氏〈針葉樹会先輩〉
宅でご馳走に預つて楽しかつた。
今度の山行は、僕たち三名はSupportの役を引き受けたが、色々の部分で完全な役目を
はたされずすまなく思つた。しかし僕たち初めての冬山がかくも盛大に成功した事は、

一に天候の為であろうが、次には五人が一心全体になった事が先ず上げ得る。北岳登頂のよろこび、僕は永久に忘れる事はできぬだろう。バットレスも成功して商大山岳部は第一線におどり出た。16時間〈小谷部、森川による第1尾根初登、第2天幕発午前6時、同帰幕午後10時〉の死闘はともかく常人ではできぬ。間ノ岳を簡単に登ったに反して、かくも余分にかかったかを見ると、いかに冰壁の登攀が困難かわかつてくるのである。助さんのがんばりとあの足をいためているのに〈11月奥又谷で踝骨折〉、よく登れたというより賞し様がない。僕はただ嬉しかった。)

〈註：1月3日望月、日江井下山後、小谷部、森川は5日第4尾根登攀、6日第1天幕へ、8日下山途中ビバーク、9日大曾利へ下山した。〉

昭和12年（1937） 予科3年 20歳

2月 <高尾山スキー>

4月 <大倉高丸> (新入部員歓迎登山)

4月 <八ヶ岳、行者小屋生活> 上棚之木—南沢経由—奥ノ行者小屋
—中岳と赤岳の鞍部—赤岳往復

(山日記より)

赤岳岩稜登攀 (望月、大塚)：昨日登った沢を行く、左に折れて這松を漕ぎ岩場下に着く。天気は上々、しかし風が強くすこし寒い。南の駒などが良く見える。9時過ぎ anseilen、望月・大塚・日江井の順で登る。はじめはのんびり行ったが、ルンゼを通って上に出た所から、悪場になる。わずかな band をつたわるので、体が外に放り出されそうになってこわい。…ridge どおり登って、一度向うの尾根に traverse をする…頂上へは11時半に着く。…僕らは阿弥陀へ登る。…頂上から見れば、立場谷が鋭く山ひだに食い入って流れている。南、木曾の山々が美しい。北も手に取るように見える。夕日が照らしだしたので、急いでコルまで下る。そこからしばらく glissade の痛快味を味わひながら、小屋へ着く。)

横岳往復、—赤岳—権現岳—編笠山—押手川一小淵沢

5月 <富士山> 富士吉田—馬返—五合目小屋—頂上—小屋一下山

(山日記より)

前夜あまり眠れなかつたので、仕方なしに早く起き飯の仕度をする。人数が多いので何かと時間を食ってしまう。五時出発す。本年は大分雪が少ない。五時半天地の境に出て、美しい火山砂の中をさくさく歩む。…七合目よりアイゼンを着けて登る。ツアッケが良きいて気持がよい。八合目の急斜面もなんのその。…火口へ来て眺めてから、glissading の快味を味はいつつ、下りにつく。五合目で帰り仕度を整えてから、馬返まで一気に下り、長い途を吉田まで流しこんだ。浅間神社へ来た時はホッとした。

5月 <大武川より甲斐駒摩利支天南稜登攀> 同行：大塚、富士山下山後、大月の宿泊、大月一日野春—雨のため大藪鉱泉泊

(山日記より)

25 —赤薙橋—大武川—サデの岩小屋

橋を渡つてよいよ大武川に入る。渡渉を済ませた後しばらく山の腹をまいてゆく中にヒヨングリの滝に出た。…踏跡はしっかりしているが道は荒れている。川へ下りきると

第一の悪場…廊下のような所に来て進退極まったが、フト見ると向う側にケルンが置いてある。イザ渡渉となるととても困難…鉈を取り出して橋を作る…橋を渡る時が恐ろしい。どうにかこれを越すと又また悪場の連続、やっと河原へ出ると又渡渉、100米も来ておらぬ。軽業式にどうにか飛び越えて向う岸に達す。…地獄谷の出合に出る、ここから道が判らず…熊笹を別けヒタ登りに登る、摩利支天が威嚇するように立っている。今度は針葉樹の中を歩む。やがて岩小屋らしいものが目に付く。)

26 摩利支天南稜登攀、所要5時間余—仙水峠—岩小屋

5時出発、六町ダテ〈大武川ゴルジュ帯の高捲き道〉を辿り、道が川筋に下るところで右へ登り取付きに至る、6時。石楠花やブッシュを漕ぎ、上部の花崗岩スラブ下の大きなバンドを左側の稜まで辿る。

ここからいよいよ岩登りだ。まだザイルはつけぬ。…バンドがどうにも行けそうにならない…草付の急斜面を靴の nail を利かして下り、滝で hold を探して登り…木登りとクレッテライのコンビである。これら一頻り行くと前面にはそいレンゼ状の岩、割れに沿つて行かねばならぬ…しかし hold 皆無なので身の軽い大塚が小生の肩にのりて上へフリクションで登る。次に荷をまとめてずりあげ、さて小生が登ることになるが、足のホールド全くなくて friction に由るほか道がない。こんな箇所を2ヶ所ほど越すと更に悪場…木の根につかりほとんど overhung の所を懸垂登りに頼るほか道がないのである。左側の稜〈南山稜?〉に7時50分出て上記の登攀。上の帯につながる緩傾斜帯2600米で昼食、10時25-40分。

見上げると…行けそうな band、花崗岩のビランした所は歩きづらい。地獄谷に面した所では遂に靴を没する位である。又すこし快適なる kletterei を楽しみつつ、這松の中からヤホーをかけると反響がある。急いで摩利支天の頂上から縦走路の方を眺めれば本科の人々がいる。すこし休憩の後、駒頂上さしてひた登りに登る。頂上では、望月、船本両氏が来て居られた。…いよいよ下る。天候はいつの間にか悪くなってきた、粉雪がチラチラ降る。…仙水峠へゆっくり下り、二氏は北沢へ僕らは岩小屋へ、明日の再会を約して下る。摩利支天峰着、11時10分—駒頂上着、11時50分—岩小屋、4時20分。

27 —北沢小屋

28 アサヨ峰往復

29 —戸台川—黒河内—伊那

7月 <剣沢合宿> 富山—千垣—称名の滝下まで自動車で行く（後発隊12名の内）—弘法一天狗平小屋—雷鳥沢—剣沢三田平

(山日記より)

源次郎尾根登攀：(小林、岩崎、原、鷺崎、榎本、大塚、木島)

長次郎雪渓の下部から取付き、ひどい藪こぎの末、稜上に達しII峰まで至ったが、II峰下りのギャップを下れず、一旦長次郎雪渓に戻り) 側から源次郎第II峰上コルに取付くことにする。この頃より猛烈な雨、じょんじょん登ってコルに到着。ここからたやすい所をじょんじょん歩いて、頂上に1:30pmに着く。雨が止み薄日がもれてくる。

八ツ峰、II・III間コルより登攀 (大塚、木島)

今日は予科だけで行ってみようと思って出発する。断然張切って早くにII・III間雪渓の上に

出る。…V峰まで調子良く行くが、ここからいよいよ六ヶ敷くなる。VII峰まで相当ルートの取り方に由って面白い所がある。…今日は本当に気持ちよい岩登りが出来た。

7月 <剣より槍ヶ岳縦走> 剣沢—五色ヶ原—スゴ乗越—薬師岳肩—薬師岳—黒部五郎鞍部—三俣蓮華—双六池—槍ヶ岳肩、小槍登攀（森川、船本、大塚）、後、上高地小梨平へ下山

7月 <上高地生活> 悪天、滞在続く、上高地散策ほか

8月 <奥又白生活> （小谷部、望月、森川、佐々木、上高地—奥又白池畔幕営）

（山日記より）

四峰正面壁試登（森川）

猛烈に落石の多いルンゼを抜けて、バンドに出る。ここからパーティを分ける。〈小谷部、望月、佐々木は甲南ルートへ。森川、日江井は正面壁へ。〉僕らは正面を登る。大分登って見ると流石よくない。どこへ行ても完全に確保するところがない。…頂上より少し下のスラブでつまる。ここに於いて森氏ピトンで僕の肩から登らんとしたが、しかし安定良くななく又ホールド少なきため止めることにする。（甲南パーティも）引返したらしい、声をかけてアップザイレンする。ザイル二本連続してやっと下りる。）

A沢から前穂往復（望月、佐々木）

〈小谷部、森川は四峰甲南ルート登攀〉、僕らはのんびりと頂上で二時間半待ったが〈二人が来ないので〉頂上でのびて帰る。上高地、涸沢が画のように美しい。

前穂東壁登攀（森川）

雪渓は一番左の方〈C沢と思われる〉をコースにとる。途中一ヶ所のクレバスは右の尾根を高回りする。〈アップザイレンで再びC沢に入り〉最奥の雪渓を目指して進む。天幕から見てスラブ右の、白く見えるルンゼを登る…雪渓最奥は悪く、ステップを切ってからうじてテラス状の所に出る。ここから頭上のオーバーハングを乗り越すのだが、よくないのでピトン使用する。金具の響きが小気味よく岩場にひびいてくる。これを乗り越しルンゼ状のところを辿って登ると、天幕から見える白いザレの所に出る。ここから見る前穂の壁の片鱗はとても凄い、ツルツルでまるでセメントか何かで固めた様な所だ〈Dフェースのことと思われる。登ったのはDフェースとのコンタクトラインに沿ったルート、Aフェースには出ず、そのラインを前穂頂上まで直上〉。…さて之よりピトンの連続使用によってチムニーの上部に出た。そこから又々上が悪い、之からが本当の悪場になって来る。スラブの上のちょっとしたクラックを見つけて、ピトンを連続四本位打って足場にして上って行く。僕がそれらを抜かねばならないのでつらい。

頂上直下のスラブについた。ここで又ピトン連続四本打って、トップの森川氏が岩に手をかけるとグラッと動いて危く投げられそうになったが、ピトンで助かる。ピトンは有難いものだということがつくづく判った。ここを越せばもう何でもないことがわかり、天幕に向って「ヤホー」を叫ぶ。…勇躍頂上へ、四時半着。のんびりと夕日を眺めつつ下る。天幕では皆よろこんでくれた。うれしかった。ピトンの技術はむずかしい、もっともっと練習することを誓う。

僕は今度の夏休みくらい山に満ち足りたことはなかった。又、奥又池の気持の良さ、…奥山の仙境といふ感じが深い。この冬入れたら入りたい所だと思ふ。

9月 <奥秩父縦走> 菩崎—八巻—黒森—松平牧場—瑞牆山往復—大日小屋—金峰山—大弛小舎

—北奥千丈—国師岳—甲武信岳—甲武信小舎—破風山—雁坂峠—笠取小舎—将藍峠—飛龍山
—雲取捲いて武州小舎—雲取山—唐松谷—日原—氷川

(山日記より)

下界の慌しさを逃れるわけでは無く、只自分の一途に思って居たことを実現したにすぎぬ。今度の縦走も他の人の目から見れば、充分逃避的で有ったかも知れない。しかし僕は、現在東京の人々はあまりにも周章した風ではないだろうか、毎日鳴物入りで兵を送り出すことはもっての他だ、出征兵士でもこれを望んで居るのは数多くあるまい、と思ふ。そういうふ(送る)人々は却ってそんな暇に業務に精励した方が良いのではないだろうかと思ふ。

僕はその意味で秩父を歩いた。秩父の山々は色々僕等に教えてくれた。あの森林美となると渓谷は忘れる事は出来ぬ。特に信州側の谷の美しさ、秩父は渓谷を歩かねばならぬとつくづく思った。昭和十二年九月十日朝、記す。

〈註：昭和12年7月7日の盧溝橋事件以来、華北で日中戦争が始まるが、8月には戦火は上海一帯に波及、全面戦争に突入して、日本は戦時色に染まる。9月初めのこの頃は奥多摩でも出征ムードに酔っていた、ということなのだろう。〉

〈参考：この秩父行記述で、1937年版山日記の紀文は終っている。ただ、「登山経歴」欄のページ最下行に一行だけ、「12.17-20 奥又白松高レンゼにて遭難す」、と記載あり。但し同年10月にも、もう一度前穂東壁を登る山行をしており、12月にいよいよ東壁積雪期初登攀を志す冬合宿に参加、その入山路で雪崩に遭遇する。多分、それらの紀文は冬の山行を終えてから日記に記入するつもりだったところ、思いがけず遭難してしまったが、病床ではとてもその状況・所感などは書く気が起きなかつたのだろう。登山活動は、それ以降昭和13年（1938）11月になって怪我全快するまで中断するが、それらの紀文は山日記に一切記載なく、『針葉樹』十号記録欄に掲載の記録のみ残されているに過ぎない。〉

10月 <奥又白生活> （小谷部、森川、大塚）

10.21～22 前穂東壁（森川、日江井）

(針葉樹十号記事「前穂高東壁に就いて」より)

（C沢の滝突破に時間取られ）、取付きが遅くなる（12:00）。中央の岩盤とCフェースとのコンタクトラインを登ったが、確保用のハーケンを連続使用せねばならず仲々面倒、遂に第二テラスの下縁にてビバークと決する（19:00）。

翌朝8:10 ビバーク地を発ち、第2テラス、Aフェースを経て、急いで登ったが疲労の為時間がかかった。頂上11:20。）

10.24 四峰正面壁（森川、日江井）

現在の明大ルートを登ったと思われる。

（註：同ルートを前々日小谷部、大塚で登っている。また、この日二人は東壁登攀。）

12月 <徳沢小舎生活> （先発隊、森川、榎本、船本、大塚、日江井）中の湯—徳沢

10.20 松高レンゼールンゼ登攀中雪崩に遭遇

午前10時小雪の中、松高レンゼに入る台地の右手大岩にスキーデボ、輪カンに履き替え、5人交代で膝を越すラッセルをして1時間後、森川、榎本、船本、日江井、森川の順で

登高中、雪崩発生。日江井は左腕骨折、森川は埋没したが掘り出された。

(針葉樹十号より)

「丸太の上を転がされる様な感じだ。今度こそ駄目だ…また手を動かす。然しどれが手でどれが足だから判つきりしない。家の事、学校の事がやたらに目に浮かぶ。呼吸はこらへてしなかった。又楽になる。勢を減じて来た、どうやら止ったらしい。夢現の中からはっと目を覚ました様に少々ぼんやりしている。が雪の上にいるではないか！嬉しかった、まだ生きていたのだった。起き上がるうとした、駄目だ、見れば右足が雪の中だ。取らうと左手を使はうとするが駄目、どうにかしたらしい。右手で掘って起き上らうとしたが又倒れる。足が痺れている。」(日江井手記)

「一昨日は重荷に耐へて希望に充ちた上高地入りしたのに、今日は三角帯で腕を釣って輪かんでポクポク山を下る。…産屋沢は取入の辺りから河原へ下りて下を回ったが、…河原の石に輪カンが挟まって腕が使はず立往生してしまふ日江井の姿を見ると、何とも云へず暗い気持になる。中の湯では丁度今着いたばかりの後発隊に遭ふ。…夜は一部の者で今後の計画につき話し合ふ。先づ日江井は小谷部が付き添って松本に下し、医者に見せた上で帰京せしめ、小谷部は1日遅れて入山することとする。…予定した規模での池の合宿をそのまま行ふのは無理だらう…1週間全員徳沢に合宿し…奥又白の計画は日江井の代りに船本を補ひ、…その後に行ふこととする。」(この頃、小谷部筆と思われる)

昭和13年（1938） 本科1年 21歳

11月 <三峰縦走> 三峰—武州雲取小舎—雲取山—七ツ石—帰京

(針葉樹十号より)

長い禁足生活を解かれてはじめての山行。谷々は紅葉で見事であった。夜山頂で月見をやる。

(翌日) 茅戸の尾根を一目散。六ツ石でのびて煙霧にかすむ関東平野を見下した時、病院で、或ひは家で考えていた事がまるで嘘の様な感じがしてならなかった。

11月 <乾徳山> 山岳部懇親山行。快晴の頂上の気持良き眺望、有り余る食物。

昭和14年（1939） 本科2年 22歳

4月 <大倉高丸> 新入部員歓迎登山。霧の山頂を早目に下りて田野鉱泉でコンパ。

4月 <富士山> 富士吉田—5合目—頂上—帰京。烈風のため8合あたりは慎重に登る。

5月 <谷川岳> 新人雪上技術練習が目的、マチガ沢より谷川岳往復。翌日芝倉沢往復。

10月 <穂高・滝谷> (同行:船本) 行動詳細不明

昭和15年（1940） 本科3年 23歳

3月 <穂高・奥又白谷> (船本、久保) 奥又白池まで往復したと思われる。

6月 <穂高・滝谷>

滝谷第一尾根登攀 (大塚、山田)

登攀中日が暮れ、3人ばらばらでビバーク。「Bフェース上のテラスで大塚、フェース中段で日江井、下段で山田、と三人三様で岩に持たれて。快晴であったが寒い寒い一夜だった。」(『山

田亮三山行譜』より)

付：卒業後の登山記録

昭和 44 年 (1969) 52 歳

6月 <乗鞍岳－上高地－八方尾根> (86歳老父の案内)

7月 <御岳・王滝口より往復、木曾駒・伊那側ロープウェイ利用>

8月 <白馬・蓮華温泉から白馬岳> (針葉樹会懇親山行)、大町エコノミスト村－平岩－蓮華温泉－白馬大池小屋－白馬岳－大雪渓－細野

9月 <三平峠－尾瀬> (老父同行)

昭和 45 年 (1970) 53 歳

9月 <荒沢岳> 小出－銀山湖畔宿泊－荒沢岳往復－小出

昭和 47 年 (1972) 55 歳

8月 <燕岳> 中房より燕山荘往復 (燕山荘で天候悪化、餓鬼岳行きをあきらめる。)

追跡「一橋山岳部の軌跡」の顛末

倉知敬

『針葉樹会報』一一九号に「一橋山岳部の軌跡」と題して山岳部創設以来の足跡をまとめたものを発表してから、もう二年余経つ。刊行して直ぐに、あれには資料不足でどうも書き足りない部分がある、特に歴史を彩った何人かの興味深い先輩方についてもつと知りたいことがある、という気持ちが強くなつた。しかしそれには、主に『針葉樹』を原典として部の歴史を追いかけて来たこれ迄の枠から飛び出して、未発表の隠れた補足資料を掘り出さなければならないが、それにはどうすればいいか何かの当てがあるわけでもない。

もつと知りたいと関心を呼び起させた先輩方とは、戦前の山岳部發展過程の転換期に登場する印象的な存在ともいいうべき人々である。例えば、横倉吟三郎、十合健一、森川真三郎、日江井正巳、中村讚治、といった先輩方が、それぞれの時代で意義ある足跡を印して来られたのは表面的には判つてゐるが、その活動の詳細や隠れた背景を知ることが出来ないか。当ては無いがともあれ、山日記などの資料を訊ねて主に遺族関係に接触、山関係の縁故者などへのインタビュー、を念頭に追いかけてみようか、と考えた。

そうしてボツボツ進めては見たが、思い付きでやる程度では一向に確かな手掛かりにぶつからない。時は経つても、これ迄のところ到底捗々しく行かず、何かの道が開かれる予感もないのである。とにかく、何か書き遺したもののが発見されなければ取りつくしまもなく、それに至る遺族や関係者への接点がなかなか見つからない。やはり、時が経つて見渡せば物故者ばかり、というわけで、そもそも思い付くのが既に遅かつたのである。

〈中村讚治さんと松高山岳部の人々〉

資料追跡に取り組んでみると、やはり時代が近い人の方が何かと方法が見つかり易い。中村讚治さんは、終戦直前の一九四四年三月に、旧制松本高校山岳部の山上良夫さん（中村さんとは東京高等師範付中で同窓）と、前穂高東壁Aフェースを登攀した、という記述（『針葉樹』十一号、石井左右平「十号以降の歩み・昭和十八年（二十一年）」）があるが、記録の詳細は不明である。

一方、松高山岳部は一九三九年十二月にAフェースを厳冬期初登している（折井寛・清水賢二）。更に一九四〇年三月に、最後に残された未登のCフェースに挑み、二十一日初登（折井・北村正治）した。しかしながら、第一テラスのCフェース終了点で待機していたサポート隊（春田和郎・久留健司、兩人は十九日にAフェースを再登している）と合流し下降中、V字雪渓で雪崩に巻き込まれ、折井と春田が遭難死、以降松高山岳部は解散を余儀なくされた、という因縁が纏わっている。中村さんが書かれた記録はないと思われるが、むしろ山上さん側の松高関係資料を辿れば、あちらにも宿命のAフェースのことだから何かの記録が残

例外的に、日江井さんの記録については、縁あって山日記と自叙伝といふ充分な資料の存在を知り、ご覧のよう別稿として纏めることができた。他の方々については、何がしかの努力はしたもの、どうやら纏めて報告する程の成果はこの先も得らないだろうと悟るに至り、仕方なくこのあたりで追跡の顛末だけを、以下に報告するに留めることにした。

されているかも知れない、と考え、追いかけることにした。

山上さんは旧制松本高校から東大進学、東大スキー山岳部OBでもあるので、東大に縁のある丸子博之さん経由で同OBの藤本慶光さんにお願いしたところ、山上さんと同期の栗林行二さんに連絡が取れた。しかし同氏も他のOBの方も、また山上さんの奥様も、記録の存在なり伝え聞きの類なり、誰も何も知らないと判明した。ただ関連して、Aフエー

ス初登者（故）清水賢二氏の実家は松本の越中屋という果物屋であり、また松高山岳部の部報『わらじ』は戦前で廃刊も、補遺号や会報もあり、松本市立博物館分館・旧制高等学校記念館に保存されている、と知った。

そこで、松本在住の有賀盈さんに協力を願い、ある日打揃つてこの両方を訪ねたのであるが、目指すものは遠い。越中屋では親切に応対して頂いたが、清水さん遺族には何も残されてない由、ただ松高山岳部OBの溜まり場だったという酒屋米田屋を紹介された。その足で直ちに米田屋を訪ねたが、店頭で応対して下さったご家族のお話では、関係者高齢化で今はもう集合する事情にはないと言うことだった。さらに関係者に繋げる道はここで閉ざされてしまった。

一方、旧松高の敷地に設けられた旧制高校記念館は、松本市の真中にあり、鬱蒼たる木々に囲まれ由緒ある建物が並ぶ立派な総合施設である。ここの一施設である展示館では、山岳部誌『わらじ』を始め様々な資料が揃つて保存されており、学芸員・臼井邦彦氏がいろいろ親身に関わりのありそうな資料を探して下さったが、目的の記録はどこからも出てこない。特に山岳部解散後の資料は僅かに限られたものしかないようだ。所詮、戦時下では山の記録を発表するなどの大胆な行為は憚るしかなかつたのだろうし、また戦後どさくさになつたら思い出などは振り返る余地もなかつたに違いない。そういう当たり前の実状に納得するのが行き着いた先だった。（ところで、この記念館は、一九五〇年学制改革により廃校となつた旧制松本高校をはじめ戦前の旧制高校四十一校の集合

資料館であり、その中には官立大予科六校も旧制高校と同学制上の存在として含まれており、東京商大予科も対象の内である。館内には商大予科の寮の風景や学生生活振りの写真が飾られている。戦後の新学制で一橋大学前期の修学を経た者にとつては、松本訪問の節は一見の価値ある記念館である。）

〈森川真三郎さんと房州茂原農学校勤労奉仕〉

前穂東壁初登攀者・森川真三郎さんは、東壁登攀で重度の凍傷を負い闘病の末、後遺症はあつたが治癒された。その後、信州富士見療養所で結核療養中の小谷部さんを見舞訪問したが、その後に小谷部さんが逝去されるという事態に遭遇。落胆した森川さんも富士見で病死されるという劇的な顛末となつた。森川さんは凍傷罹病からその最期の時までの五年ほど、どうされていたのかは漠然としか判つてない。何か日記の類とか、心境など綴つた手記など遺されていないものか。

『針葉樹会報』には、その頃揃つて闘病中の小谷部、森川、船本の三人の間には手紙のやり取りがあつた、という船本文治さんの寄稿があり、また、復員後森川さんの消息を追いかけた柿原謙一さんが、茂原の龍教寺というお寺の住職・鈴木康叔師から受け取つた森川死亡事情を知らせる便りについて書かれている。それらを結び付けると、森川さんはお寺に寓居し茂原農学校の食料増産運動に参画し身体を壊していたが、たまたま小谷部危篤の報に接し、無理して富士見に駆け付けたが運悪く客死された、ということになる。

たまたま私は今は茂原郊外に小宅を持ち、主にそこで過ごしているが、柿原さん宛の手紙の発信地である龍教寺というのを搜したら、そう遠くない先にあることが分かつた。そこで或る日、地図を頼りに自転車で畦道を辿り、数キロ先の本納という地区にあるそのお寺・顯本法華宗日影山龍教寺を探し当てた。

鄙びた山裾にあるこぢんまりしたそのお寺は、真新しく綺麗な佇まい、あまり歴史を感じさせる雰囲気ではなく、古いことを訊ねるには戸惑いも感じるが、とにかく門扉を叩いた。応対に現れたまだ年若い川崎英真住職は、ピンと背筋を伸ばし対座し、静かに話を聞いて下さった。直ちに過去帳を調べ、森川さんの墓葬記録のないことを確認、また周囲の村落の古老に戦後勤労奉仕の実情など尋ねて回つてみようと、まことに親切に協力を約してくれたのである。

その内に再訪しようと思つていたところ、しばらくして手紙が届いた。その伝えるところは、以下のようなことだつた。地元の年配者（七十から九十六才）の方々に聞いて歩いた、戦時中は兵役ほかで地元を離れた人が多く、この地域の歴史に空白がある。誰も龍教寺に疎開した人があることを知らない、地元に残つた人々で茂原の旧飛行場（現三井化學）に勤労奉仕に出た人はいる、當時農学校と呼ばれていたのは茂原農業、山武農業（現茂原農業高校、数キロ離れた地区にあり）しかなく本納地区にはない（昭和二十五年に分校発足）、森川さんが疎開して農業勤労奉仕をしたのは本納ではない別の地区であり、鈴木住職（物故）との繋がりは何か別の縁ではないか、以上は推測であるが、とにかく手懸りは掴めない。

どうやら疎開先の農業奉仕集団寄宿先は農学校主体のものと思われ、リンクするものが途絶えてしまつたが、念のため茂原図書館の資料室を訪ね、茂原農業高校の歴史資料などを閲覧して來た。ここでも係員がまことに親切に応対してくれ、書架を走り回つて次々と古ぼけた報告書類を机の上に並べるのであつた。折から暑い盛りの夏、冷房なしで吹き出す汗を拭いつつ目を通したが、どうしてこう無味乾燥な書き物ばかりなのだろう、ピンと来る記録に行き当らない。確かに茂原界隈に幾つかの農業増産地区というものが散在し、農学校関係者を中心の運営が為されていていた時期があることは分かつた。しかしそれは如何に収穫を成

し遂げたかという記録だけ、関わる人たちの勤労物語はもとより、何しろ名前すら表れないものである。ここで流石に追跡する熱意も冷め、総て徒労に終つたのだつた。川崎住職にお礼がてら、愚痴るだけの返答を記した手紙を送つてお終いにした。

〈十合健二さん、遅れた追悼記の代りとして〉

十合健二さんは、昭和八年度（一九三三）に一橋山岳部代表を務められた先輩だが、丁度その頃の一橋山岳部は、創立初期の謂わば開拓期的活動の継続時期から、次の登攀志向活動中心の新規発展期に移行する狭間の、短い端境期に位置付けられる時期にあつたよう捉えていいかと思われる。象徴的に、その時期（昭和七年度から九年度前半の約一年半）の活動報告たる『針葉樹』七号は薄い本で、前後の号はどちらも三倍くらい厚い。また、一後輩の意識として、それ以前に活躍された例えは磯野計藏さんとか、それ以降の堀岡清さん達は印象深い存在として映り、それぞれの時代の熱気を体現する人たちであるかのように見える。

しかし、埋もれた中にもキラリと光るものはある。「一橋山岳部の軌跡」を編纂した時、十合さんは山岳部創立十年目を劃する象徴的な存在であるかと思われ、そしてその年の夏（一九三一・七月）、當時まだ谷川岳南面初登攀競争の頃、谷川本谷遡行を果した十合さん（及び他一名）の山行が関心の的となり、そのことを特筆した。この度追跡したかつたことの一つは、この山行の詳しい記録である。まずは十合さんご遺族に、山日記存在の有無を尋ねて見たい。

十合さんは卒業後苗字が変わり、針葉樹会名簿には森健二（昭九卒）として掲載されていたが、平成十一年（一九九九）一月三日に逝去された。『針葉樹会報』に追悼が記載されることなく、筆者が没年を知つたのは、如水会事務局を訪ねてのことだつた。会報の追悼掲載は、その前後は九八年十月没の中島寛（八八号）、九九年十月没の高野秀男（九〇号）

であり、その合間に森さんの訃報は伝わることなく過ぎてしまった。実は、筆者は八八号（九九年四月刊）まで編集幹事の一員だったので、見逃した責任の一端を負わねばならぬ立場であり、まことに申し訳ない次第だ。

さて、記録を追う手段としてまず、会員名簿記載の電話番号に架けて見たが、古い名簿でもあり矢張り応答がない。次に如水会事務局で、こちらの身分目的を説明してご遺族の連絡先を訊ねた。上記の没年月と共に三鷹の遺族住所電話を教えてもらい電話してみたが、何度か試みても応答しなしだった。如水会名簿最新版で元勤務先・森六商事を搜しご遺族と思われる森姓の顧問の方に電話、これも応答なし。しつこく繰り返すのも憚れ、それで諦めた。

一方、如水会図書館に何か物故会員の資料がないのかと考へ、事務局で鍵を貸してもらいガラス張り閉架書棚にびっしり並ぶ名簿類を追いかけてみた。会員資料というものは卒年などによりマチマチであるで不備なものであり、立派な会館を維持している割には人の歴史には冷たいものだと痛感したが、思いがけず森さんの卒年である昭和九年会は例外的に緊密な連携を保つていることを発見した。何と、月報の同窓会誌が刊行され続けているのである。そこに森さんの追悼記事もあつた。

『昭九だより』四七四号、平成一一年二月一日刊、に村上清さんという同期生の方が追悼記を寄せられていた。村上さんは石神井の予科で同クラス、十合さんはスポーツを好む温厚誠実そうな青年だった、と思い出を語つておられる。かの有名なデパート・十合創業家の次男であり、卒業後（如水会名簿には森健二・旧姓十合とある）は、森家を継いで森六商事を経営された。事業はジーンズなどの繊維製品関係、追悼記には、吉林省を訪ね藍染めマーケットの視察をされた話を拝聴した、などの思い出に触れられている。また、引退後にはご夫人とカトマンズ旅行をされた、などと山の趣味に繋がる思い出も記されている。平成一一年一月

八日、中野宝仙寺で告別式、とある。

さて、肝心の谷川本谷遡行についてであるが、十合さん他一名の遡行一年前の初登（上田徹雄・哲農、ガイド田村寅松）記録は、日本登高会報に載っているのを『きのうの山きょうの山』上田哲農著に転載された。当時の山の雑誌「山小屋」には上田哲農がずっと表紙絵を描いていた。十合さん一行の他一名とは、初登の関係者がらみの人かも知れない。その後の一シーズンの間にそう多く登つてもいらないだろうし、ひょっとしたら他一名氏の方で「山小屋」などに第何登かの記でも寄せてないか知らん、とも考へ、山の古本屋を訪ねて床積みの古雑誌を穿る試みもしてみたが、いくらも揃つてもなく、どうにも手がたえなしであった。とにかく古すぎる話で、何ともならない。

十合さんは一体どういう発想で谷川岳の沢に目を付けたのだろう。それには登山歴にヒントがあるかもしれないと思い、『針葉樹』何冊かの記録を拾い出して、簡単な山行譜を編んでみた。欠けている追悼記としては参考にも供するし、本稿末尾にそれを掲載した。

一覧すると、穏やかに山を楽しんだ気持ちを彷彿させるような、たんたんと登つた足跡を追いかけることになる。特に谷川岳ほか上越の山に傾倒したというわけではなさそうだ。しかし中でも筆者には、本科一年春の北ノ又川入り行参加と本科二年夏の谷川本谷遡行が俄然目を引くものに見え、山岳部時代の最も充実した時期の手ごたえあつた体験、たつたに違ひない、と推測されるのである。そしてこれらは、結果的に初登とすれば違つたような当時としては画期的な要素を含んだものだつた。多分、十合さんは充分満足する山岳部生活を送つた、と思って卒業されたことだろう。

以上、追跡の弁を述べて来たが、中身のない話はここらで止めよう。そもそもは、歴史叙述には本紀があり列伝が伴うという例に倣つて、隠

された史料を発掘し、一橋山岳部史を彩る個性豊かな人々の列伝が添えられないものか、という野心を抱いたのが発端だが、到底『針葉樹』の記録以上のもの迄に達することは出来なかつた。横倉吟三郎さん（昭六卒）という人についても知りたいと思つたが、ここまで昔の人になると取つ掛りすら見出せない。戦前の『針葉樹会報』も通してめくつてみたが、あれは書く人は決まっていて、そうでない人は全く登場しないものだと判つた。内容もどこか偏つていて纏まらない。どうしても個人の書き遺した資料が無くては困るのである。

それにしても、『針葉樹』という継がれたものが遺され、各巻を紐解けば繋がつてきた大方の事象が捉えられるというのは、何と素晴らしいことだろう。それだけでも、繰り返して來た登山の有り様をはじめとして、伝統というか価値観というか、そこに貫くものの存在を認識することが出来る。あらためて『針葉樹』に見る一橋山岳部の軌跡を、大切な宝だと痛感するばかりである。

付表：十合健二山行譜

昭和4年度（1929） 東京商科大学予科2年

- 4月 19日 石神井予科山岳部部室での新入部員歓迎会に出席
6月 <丹沢> 6.8 与瀬－焼山－カヤノ沢－蛭ヶ岳－塔ノ峰－大倉
3月 (昭和5年) <野沢温泉、春季スキーハイキング>
3.7～14 野沢・酒屋宿泊、スキーハイキング参加

昭和5年度（1930） 東京商科大学予科3年

- (一橋山岳部代表－磯野計藏、記録－十合)
- 4月 <大菩薩嶺> 4.20～21
<谷川岳> 4.28～30 雨天のため、天神峠まで。
7月 <裏銀座縦走、上高地生活>
7.5～13 葛温泉－烏帽子岳－槍ヶ岳－上高地
7.14～17 14日焼岳、15日前穂高岳、岳沢より往復。
9月 <谷川岳>
9.19～20 谷川温泉－天神峠－谷川岳－西黒沢－土合
10月 <神津牧場>
10.21～23 追分－八風山－物見山－神津牧場－荒船岳－初谷温泉

昭和6年度（1931） 東京商科大学本科1年

- (一橋山岳部代表－高瀬進三)
- 5月 10日 大学校舎、国立移転記念祭
5月 31日 山岳部国立部室 落成披露会
5月 <尾瀬>
5.9～15 戸倉－富士見峠－ヌウ岩往復－燧岳往復－尾瀬峠－戸倉
6月 <南アルプス縦走>
6.1～6 甲斐駒－仙丈岳－両股小屋－北岳－広河原－白鳳峠－御座石
7月 <北アルプス縦走>
7.7～17 安房峠－笠ヶ岳－薬師岳－立山温泉
<森茂牧場> (単独)
7.19～21 猪谷－青木峠－牧－山咲峠
11月 <丹沢> 11.22 馬屋－柏山峠－蛭ヶ岳－塔ノ峰－大倉
12月 <富士山>
12.19～22 富士吉田－5合目－7.5合目まで往復
<冬季スキーハイキング> 12.22～30 於・野沢温泉
3月 (昭和7年) <越後・北ノ又川入り>
3.17～31 小出－枝折峠－北ノ又川白澤小屋－駒ヶ岳往復－シバ澤坂倉澤間尾根を辿り、

1901m峰手前まで往復－石抱橋－枝折峠－大湯

昭和7年度（1932） 東京商科大学本科2年

(一橋山岳部代表－大田又一、庶務－十合)

4月 23日 新入部員歓迎会

5月 <日光、武尊>

5.11～16 日光湯元－金精峠－1402m－白根温泉－山崎－前武尊・沖武尊－赤倉－川場

7月 <谷川本谷>

7.6～9 谷川温泉－谷川本谷遡行－オジカ沢ノ頭－天神峠－谷川温泉

<立山、上高地>

7.14～22 千垣－追分－別山乗越－千垣－平湯－安房峠－上高地

7.23～30 上高地滞在、7.29 前穂高往復

10月 <塩原から尾瀬>

10.25～30 塩原－尾頭岐－滝ノ原－中山岐－湯ノ花温泉－唐沢峠－小繫峠－桧枝岐－沼山

峠－三平峠－大清水

12月 <冬季スキーハイキング> 12.23～30 於・野沢温泉、酒屋

1月 (昭和8年) <奥日光スキー> 1.28～30 金精峠往復

昭和8年度（1933） 東京商科大学本科3年

(一橋山岳部代表及び庶務－十合健二)

5月 6日 新人歓迎会・石神井部室

9月 10日 予科校舎、石神井から小平に移転

5月 <谷川岳・新人歓迎登山> 5.28 湯檜曾－西黒沢－谷川岳往復

7月 <南アルプス縦走>

7.13～20 夜叉神峠－荒川小屋－北沢－北岳小屋－北岳往復－農鳥小屋－雪ナガ沢－北荒川
－塩見岳－三伏峠－鹿塩

<中房から上高地>

7.21～23 中房－常念岳－大滝山－上高地－平湯

10月 <奥多摩>

10.7～8 日原－仙元峠－川乗山－御岳

12月 <冬季スキーハイキング> 12.18～1.3 於・五色温泉、宗川旅館

1月 24日 (昭和9年) 卒業送別会、卒業生・十合、大友

3月 (昭和9年) <春季スキーハイキング> 3.8～21 於・野沢温泉、酒屋

夜叉神峠周回路の記念山行

針葉樹会会長・竹中 彰

藤（久）（41）、中村（43）、川名（62）、
現役：小宮山（部長、3年）、川尻（3年）
計18名

前夜、拡大三四郎会に集結したメンバー15名と当日早朝、東京を発つてきた川名さん、

現役部員が夜叉神峠登山口に集まつた。また、同行の芦安ファンクラブ清水専務理事、山岳

恒例の三四郎会が芦安で企画されたのを機に、かねてより山岳部創部90周年記念事業の一として進められてきた2012年度分・夜叉神峠周回路整備作業が終了したので整備された部分の検分を兼ねて、夜叉神峠登山口～夜叉神峠～高谷山～檜尾峠～トンネル東口ルートの周回路を歩いた。

全体的な印象としては、檜尾峠～トンネル東口の整備対象部分は階段、道の補強等で歩き易くなつていたが、高谷山～檜尾峠の既存ルート（地図上では桃の木温泉に下る）は岩と木の根の傾斜の急な尾根で、一般人の歩行に供するにはロープや階段を設置して安全度を高める必要を感じた。

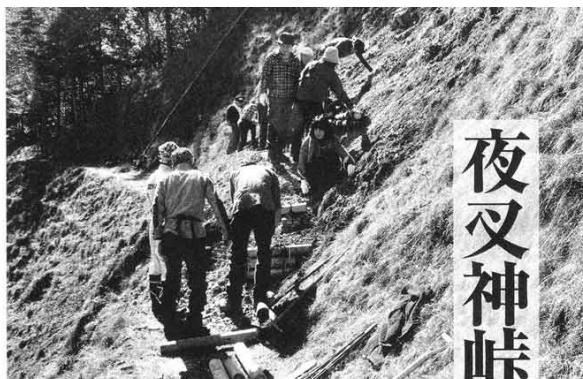
夜叉神峠に向かつて緩やかなよく整備された道を辿り、途中で地元精通の清水専務の解説も聞きながら総勢24名のパーティーが黄色を主体に、時々紅葉した広葉樹、カラマツの混交林の間をゆっくり進む。峠まであと30分の看板のある所で小休止し、清水さんから右手に鳳凰三山の尾根に繋がつていた古い道があるとの説明がある。微かに踏み跡らしきものが見られたが、最近は使われておらず藪に消えていた（1473m、9:20～30）。

少し進んだ所、横手に清水があるとのこととで、この辺りからツガ（樹肌が赤っぽい）、シラビソ（同白っぽい）が出てくる。10:00に夜叉神峠（小屋、1770m）に到着するが、

期待の白峰三山の展望は雲の中でガッカリ。少し杖立峠に寄つたところの夜叉神の祠の前で清水さんから御勅使川などに関する伝説を聞く。20分程度休憩後に黄葉の進む稜線を高谷山に向う。途中雨が落ち始め、東からの風も冷たくなる。

10:48に頂上に着き（1842m）、木々の間から北岳方面を望むが、相変わらず雲が垂れ込みて展望は利かなかつた。10分程度の記念撮影等で、桃の木温泉への降り口の標識の矢印に従つて檜尾峠に向う。出だしから傾斜の強い下降路となり、岩混じり、木の根混じりの滑り易い道を所々木に縋りながら慎重に下る。一般ハイキング客を迎えるにはロープやハシゴの設置が必要と思われた。11:45（～50）に中池、桃の木、夜叉神トンネル方面の分岐となる檜尾峠に出る。中池方面は右にトランバース道が続いているようであつたが、後刻清水さんに確認した所では数年前にファンクラブでハシゴ等整備をしたままになつていること。整備対象の周回路はここから新しい「東口（駐車場）」の矢印看板に従つて左手に入る。比較的緩やかな道が斜面にトラバース気味に付けられている。新しい丸太を組み合わせた土留め、ステップ、階段や棧道などがあり、それまでとは打つて変わって安心して歩ける道に仕上がつていた。途中、山

TOPICS



夜叉神峠東桧尾峰への旧道復活

地元と一橋大山岳部OB会が結束

んできたが、登山道整備もその一環。蔵書を受け入れてもらつたお礼をしたいと、う針葉樹会と一緒に登山道の整備をするに至った。富士通の参加者には山岳部OBが声をかけた。

登山道は夜叉神峠への入り口、夜叉神駐車場から歩いて10分ほどの夜叉神トンネル東口から桧尾峰に至るルート。かつて山仕事に使われていた生活道路で、昔安ファンクラブが2000年に舗装されたときに一度復活させたが、最近は荒れていた。通常、駐車場で車を降りた登山者は、南アルプスの眺望を求めて夜叉神峠を往復するが、桧尾峰からの下山路が整ったことで、4時間ほどの手軽な周回コースを楽しめるようになった。

27日(土)に開通記念式が行われた。一橋大学山岳部のOB会「針葉樹会」と地元、芦安ファンクラブのメンバー、富士通アイネットワークシステムの社員らがほぼ1年がかりで取り組んだ。

文・写真 宗像 充



整備された登山道。



かつて芦安ファンクラブが桧尾峰に設置した案内板を掃除する清水准一さん。

針葉樹会会員の故山本健一郎さんの蔵書約450冊の寄贈先を針葉樹会が探し、いたところ、南アルプス市の芦安山岳館が受け入れたのが、今回の登山道整備のきっかけになった。芦安ファンクラブは芦安山岳館の管理運営を行なうNPO法人。北岳を抱える山岳地域の自然保護や登山教室の開催、地域の活性化に取り組

コースから南東方向には櫛形山の一部などが望める。

今年に入つて5回の作業を重ね、最終日となった10月21日には20人ほどが手分けして作業し、登山道として復活させた。

「安全に誰でも通れる道になった」といふのは芦安ファンクラブの事務局長の清水准一さん。慣れない作業者たちに指示を出しながら「人それぞれの思い入れがあつて、それが登山道作りに表れる様子を見るのはいいですね」と語る。

クラブが市の委託を急げて管理運営する芦安山岳館は8000冊・1万冊の山岳書が閲覧できる。現在、企画展「南アルプス登山史を探る」を開催中で、そこに1925(昭和10)年の一橋山岳部のクラブマーチ小谷部全助らの北岳バットレスの冬期初登攀の記録もある。「価値ある登攀だった。そのことが頭にあって『本の受け入れを決めた』と語るのは1942(昭和17)年生まれの館長、塩沢久仙さん。今回の図書寄贈と登山道整備も含め「山の文化に理解がある人が館を支えてくれている」という。「山と向き合つたら自分

も足りない。どういう形で山とかかわるかは永遠のテーマ。100年先の世代に笑われないようにしていかないと」

一橋山岳部は今年創部90周年を迎えた。今回の登山道整備は90周年記念事業でもある。小さな登山道の整備は往時と未来を結びつける地道な取り組みともいえるだろう。



今回修復したルート

「岳人」(2012年12月号)の掲載記事

インド ヒマチャルプラデシュ・ヒマラヤの旅

佐藤 久尚（昭41年卒）

サラリーマン生活を卒業して自由な時間が取れるようになってから、毎年、年中行事化したことがある。それは、秋（ポストモンスーン期）におけるヒマラヤの旅である。最初の年は、一人でインドのガンゴトリ氷河のトレッキングとガンジス河の源流を訪ねるバスの旅を楽しんだ。2年目はネパールのクーンブ地方のトレッキングを、3年目は同じくネパールのアンナプルナ一周のトレッキングを、岡田健志（昭42年）、中村雅明（昭43年）両氏とともに楽しんだ。

毎年、春に行き先を考えて準備を進めるようしているが、今年は当初、昨年治安の関係で見送ったカラコルムのフンザに行こうと考えた。しかし、4月にギルギットで宗派対立の暴動騒ぎが起こり、治安の改善は望めそうがない。そこで行き先をいろいろ考えたところ、頭に浮かんだのが、山岳部の90周年記念事業を検討している際に、倉知さん（昭37年）から出された、ホワイトセール峰で1981年に遭難した学生3名の遺体捜索という提案であった。

もともとホワイトセールのあるヒマチャルの山には興味もあった。遺体捜索は無理としても、トレッキングに行くとしたら、どういうルートがありうるか、地図で調べてみると、マナリからトスナラに入り、サラウンガバスを越えてチヨタシグリ氷河経由バラシグリ氷河に至る、というコースがあることが分かった。そしてこのコースならば、ホワイトセールを南から北へほぼ半周するような形となるので、遭難した学生の慰靈の旅にもなりうると思われた。

また、トレッキングを終えた後、マナリからデリーへ戻るとしても、来た道をそのままバスで帰るのは面白くない。他のルートは無いかと探すと、マナリからスピティに出でキナウル経由シムラに至る車道があることが分かつた。インターネットで調べてみると、途中インナーライン・パー・ミットを要する区間があるが、ローカルバスを乗り継いで最低5日間あればデリーに戻れることも分かった。このルートだと、政治的理由で立ち入りの難しい中印国境の山々や、伝説の山キナウル・カイラスも見ることができ、トレッキングとはまた違った山の景観を楽しむことができるかもしれない。何となく面白そうだ。

さらに、折角インドに行くのなら、インド登山財団やマナリの登山学校などに寄つて、遭難した学生の遺体捜索に関する、情報蒐集や協力依頼ができるかもしれない。なにしろ遭難から30年以上も経つてるので、当時の関係者も残つておらず、遭難そのものが忘れ去られている恐れもある。この機会にそれら関係先を訪ねて、将来、学生の遺体が発見された場合には、連絡してくれるようにならんでくれただけでも意味があるだろうと思った。

というような訳で、今年は行き先をインドのヒマチャルプラデッシュ・ヒマラヤとし、ホワイトセール半周のトレッキング、ローカルバスの旅、関係先への捜索協力依頼の三つの目的として、一ヵ月間の旅程を組んでみた。インターネットで調べてみると、サラウンガバス越えのトレッキングをアレンジできるエージェントも数社マナリにあることが分かつた。早速この中の3社から見積りを取り、費用の概算見積りを作つたうえで、同行の士を募ると、中村雅明氏が手を挙げた。心強い同行者を得たので、格安航空券を手配し、二人で出かけることにした。

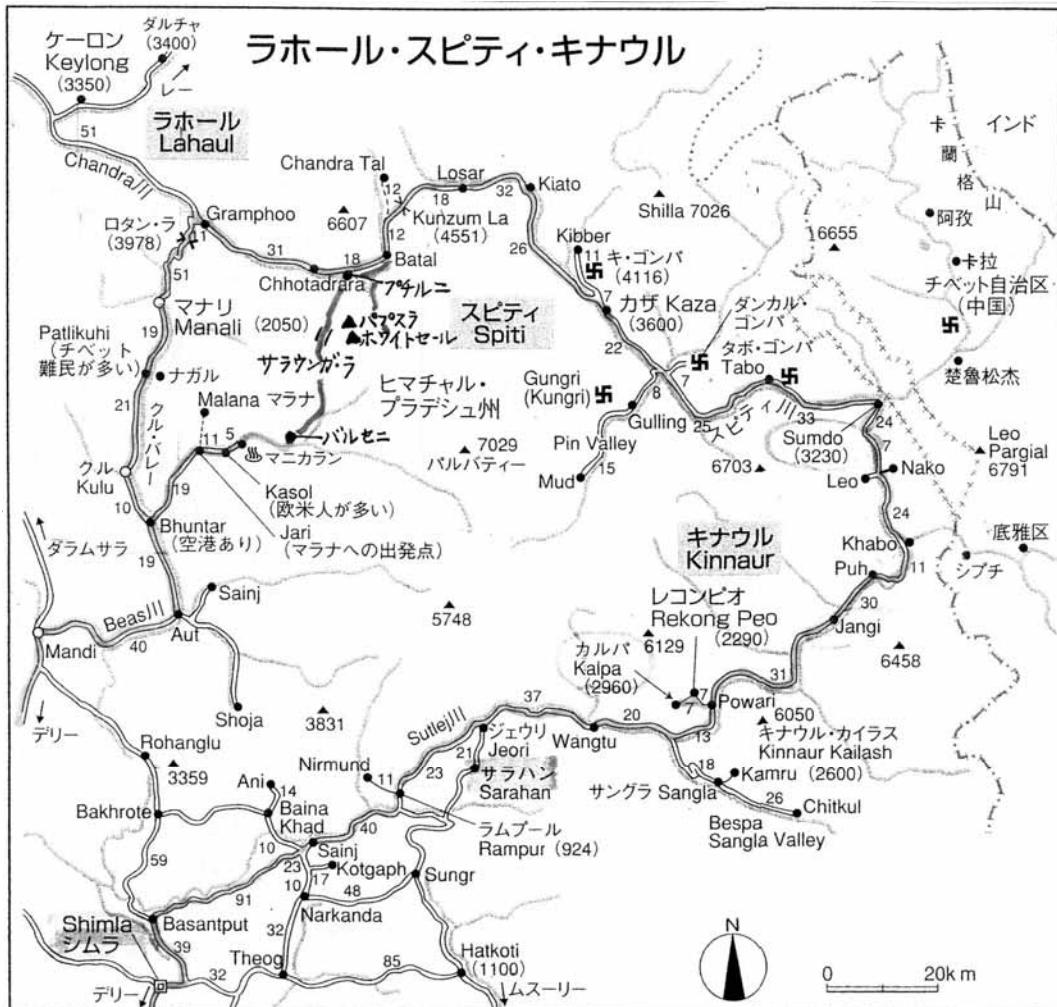
(1) トレッキング

9月13日

中国東方航空で成田から上海経由デリーへ。中国東方航空は料金が他の航空会社に較べて格段に安い。ただ上海で帰りに約5時間の待ち時間があるのが難点。しかしこれも考えようで待ち時間を利用して観光が楽しめれば、むしろ好都合ともいえる。中村氏も小生も上海は久し振りなので、街の様子を見てみたいという希望が、また小生には何よりもニアカーに乗つてみたいという気持ちがあつたので、帰りに上海で、リニアカーと地下鉄を乗り継いでバンドにて、限られた時間ながら観光を楽しんだ。

9月15～16日

夕方デリーを発車する夜行バスでマナリへ。14時間強のバスの旅であつたが、道路が昔に比べて良くなっていることと、バスがセミスリーパーというリクライニングシートのバスであつたため、それほど疲れを感じることなく、マナリに着くことができた。午後、トレッキング・エージェントのオフィスに行き、今後の予定を打ち合わせるとともに、ガイド兼コックの紹介を受ける。紹介されたガイドは、ソーハンというラホール地方出身の53歳の小柄な男で、一見頼りなさそうに見えたが、訊くと、これ迄にサラウンガバスは3



回越えたことがあるし、バラシグリ氷河はコノコルディアまで2回行ったことがあるとのことなので、信用することにした。

9月18日

昨夜から雷鳴が鳴り響いていたため天気を心配していたが、朝起きてみると土砂降りの雨。計画では今日からトレッキングに出発する予定であったが、昼近くなつても雨が止まないので、出発を明日に延期することにした。所在なくホテルで過ごしていると、ガイドが呼びに来て「ランチを作るから一緒に来い」という。ついて行くと、3階建ての集合住宅の屋上に作られたバラック建ての小屋のような処に案内された。そこがガイドの自宅で、我々の見ている前で、奥さんと一緒に玉ねぎをみじん切りにしマトンのひき肉とこね合わせて、モモ（チベット風餃子）を作ってくれた。モモの味は悪くなかったが、作る過程を見ていると、決して清潔とは言えず食欲はわからない。明日から彼の料理を食うのかと思うと、いささか不安をおぼえる。この日は夜になつても雨が止まず、まだモンスーンが明けていないのではないか、と心配しながら床に着く。

9月19日

朝起きるとまだ雨が降っていたが、小雨なので出発することにした。jeeプに我々二人

にガイドとボーター5人（いずれもネパール人）が乗り込み、バルセニという村まで行く。

9月20日

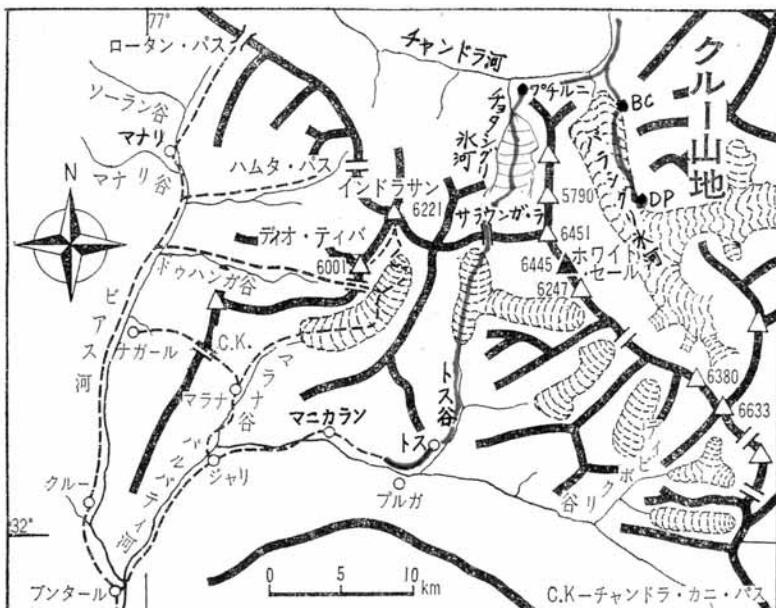
村のバス停の先でjeeプを降り傘をさして歩き出すと、たちまち雨が止んだ。約2時間歩いて本日の宿泊地トス村（2450m）に着いたが、この頃になると天気はすっかり回復し、空には青空が広がるまでになった。トス村は山の斜面に100戸程度の家が点在する集落で、ロツジも数軒ある。我々二人は村の上の方にある眺めのいいロツジに部屋を取つて泊ましたが、宿泊客は我々以外はほとんどが欧米人のトレッカー、それもヒッピー風の身なりをした若い男女が多く、ロツジは満室。何故こんな最奥の村に若い欧米人が大勢いるのか、不思議に思ったが、その謎はあとで解けた。夕方、ロツジの庭で山でも眺めながらビールを飲もうと思つて、ロツジの従業員にビールを注文すると、「ビールを買いに行くが、ついでにチャラスはいらぬいか」と聞いてきた。「チャラスはいらぬい」と断つたが、どうやらチャラスやマリファナは、ここでは簡単に手に入るようだ。ヒッピー風の若い男女は、その為にわざわざここ迄来るのではないかと思われる。翌日、村から少し歩いたところで、ガイドが「ガンジヤ」と言つて指差すので、見ると大麻が群生している所があるので、さらにその思いを強くした。

9月21日

今日も朝から快晴。最初、樹林の中の急登が続くが、森林限界を過ぎると谷が開け気持ちのいい道となる。トス河右岸の山腹の道を辿ると、かなり水量のある沢にぶつかる。それを渡つてしばらく行くと今度はきれいな小川が現れ、渡つたところが本日の宿泊地サラムサツチ（3505m）であった。サラムサツチは気持ちのいい草原で、ここにも1張りの放牧民のテントがあつた。

9月22日

今日も快晴。谷が開けて気持ちのいい山腹の道を、トスナラ上流の山々の展望を楽しみながら歩いてサムシサツチ(3850m)へ。サムシサツチはトス氷河の末端に開けた砂はじりの草原で、左手から清流が流れ込んでい



バタルから望んだ
ホワイトセール
(6446m)

9月23日

右岸の道を少し登ると、それまで尾根の後ろに隠れていたパブスラやホワイトセールが姿を現す。こちらから観るホワイトセールは、帆側が切れ落ちていて岩が現れ、雪がそれ程度付いていないのでおよそ名前のような“白い帆”というイメージはない。ただ、そこからトス氷河に向かって流れ落ちる懸垂氷河はなかなか迫力がある。登るに従いトスナラも険しい氷河の様相を呈ってきて、道も踏み跡程度になり、それも途中で分からなくなる。モレーン上の比較的歩き易そうなところを選んで歩くが、所々崩れやすいガレ場となつていて、距離の割には疲れる。13:20、本日の宿泊地パブスラBCに到着した。ここには、キャベツやナス、ウリ、インゲン豆などの大量の野菜が半生の状態で放置されていて、つい数日前まで登山隊がいたことがうかがえた。キャンプサイトのすぐ脇の斜面に小石を並べて作ったレリーフがあり、そこには「MMTA

PAPSURA EXPEDITION SEPT 2012」と記してあつた。この日は午前中は晴れていたが午後から霰のち雪となり、うつすらと地面が白くなるくらい積つた。

9月24日

快晴。モレーンから氷河に下りて、サラウングガバスに向かって伸びる氷河の雪とガレ場の斜面を登る。登るにしたがつて東トス氷河の奥が見えてきた。1967年ヒンズレークシユ遠征のあと、倉知さんが登つたピークが見えないかと目を凝らして見たが、特定することはできなかつた。どうやら角度的に見えないようである。最後は大きな石の積み重なつた急登を各自勝手なルートを取つて登ると、台地状になつたところに出た。その日はそこにわずかな平地があつたのでテントを張つたが、氷河の上なので、夜寝ていて背中が冷えるのには閉口した。

9月25日

快晴。今日はいよいよサラウングガバス(4884m)を越える日、気を引き締めて歩き出す。ルートはガレ場の急登が続いたあと雪の斜面となる。キックステップで登るも、一昨日降つたと思われる雪が積もつていて10～20センチくらい潜るので、なるべくガイド、ポーターの後を彼らの作ったステップを利用しながら登つた。登るに連れて雪の斜面

がだんだん緩くなり、平らになつたといろがサラウングガバスであつた。サラウングガバスは予想以上に幅が広く縦に長いので、峠というよりは雪原といった感じである。峠からの眺めは、北にCB山群の山々、南に遠くパルバティの山々まで見えて、疲れを忘れさせるに十分のものであつた。峠の入り口で全員アンザイレンして、ヒドンクレバスを警戒しながら進んだが、それでも小生は2度ほどクレバスに落ちた。ただクレバスはそれ程大きなものでなかつたので、いずれも腰から胸くらいまで落ちただけで止まつた。下りのチヨタシグリ氷河は、傾斜はそれほどでもないが距離が長くて疲れる。18時過ぎうす暗くなつた頃ようやく宿泊地のプチルニ(3800m)に着いた。

9月26日

チャンドラー氷河に沿つた河原と山腹の道を辿つて、バラシグリ氷河末端に位置するホワイトセールのBCサイト(3900m)へ。BCサイトはバラシグリ右岸の台地上に開けた砂まじりの草地で、脇には小川が流れ「なるほどここがベースキャンプか」と思われるような気持ちのいい場所であった。ここからは手前の山に邪魔されてホワイトセールは見えないが、31年前、遭難した学生達もここにベースキャンプを設営して、勇躍ホワイト

セールに向かつて踏み出して行つたかと思つと、胸が痛む思いがする。

9月27日

今日はホワイトセール氷河の取り付きまで行つてみるつもりで、ポーターはBCに残しガイドと中村、佐藤の3人だけで出かける。踏み跡も無いので適当にルートを取つて登るが、バラシグリ氷河が荒れていて歩き難いこの上ない。なるべくサイドモレーンの脇の平らなところを選んで進むも、大きな石が積み重なつているところが多く、石の上を飛んだり滑り降りたり回りこんだりしなければならず大いに消耗する。登ること約4時間、ようやくホワイトセール氷河の落ち口が見える所まで来てタイムアップ。ホワイトセール氷河の取り付きまでは少し距離があるが、こは学生達がデボ・ボイントとした辺りだろうと思われたので、そこをバラシグリ氷河の最終地点とした。写真を撮り、中村氏と二人でホワイトセール氷河に向かつて山讃譜を歌つて、遭難した3人の鎮魂を祈つた。

9月28日

チャンドラー氷河の広い河原を歩いてバタル／＼、13:40バタル着。バタル(3990m)はマナリからスピティへ抜けるバス道の中間点であり、また、バララチャ峠経由サンスカルへ行くトレッキングルートの出発点でもあ

るので、小さいながらも集落があるのかと思つていたが、一軒の茶店と建築中のゲストハウス、それに倉庫のような建物があるだけの寂しいところであつた。それでも我々が到着した時には、ちょうどスピティへ行くバスが止まつていて、その乗客やら、これからチャンドラ・タルへトレッキングに行くというイスラエル人のグループなどが昼食を取つてい



サラウンガ峠を目指して雪の斜面を登る



サラウンガ峠で（右から 中村、ガイド、佐藤とポーター）

て、茶店は結構賑わっていた。ここには遭難の翌年、中村君の父君や金子氏らが訪れて慰霊碑を建てたので（但し、1992年に再度中村君の父君等が訪れた時には、プレートは無くなつていて土台のみが残つていた由「針葉樹会報第79号」）探しでみたが、土台の跡も見つからなかつた。

9月29日
迎えのジープが昨夜のうちに到着していたので、朝食が終ると直ぐに乗り込みマナリへ。途中、難所のロータンバス（3978m）を越えたが、道路が3年前に比べて格段に良くなつていて、このためジープに乗つていてもそれ程揺れないでの、CB山群や、ディオティバの眺めを車窓から楽しみながら越えることができた（3年前はバスで越えたが、前の座席にしつかりと捉つていないと座席から放り出されそうになり、景色を眺めるどころではなかつた）。なお、ロータンバスは今や観光地と化していて、茶店や土産物店などが軒を連ね、大勢のインド人観光客が乗馬やマウンテンバイク、バギー車などを楽しんでいるのは驚いた。これもインドの近年の経済成長による中間層の増大に伴う現象の一つであると思われる。6時間強のドライブでマナリに着く。トレッキング・エージェントのオフィスで、代金の清算をするとともにガイド、ポーターにチップを渡し、11日間のトレッキングを締め括つた。古希の身には少しきつかったが、楽しく充実した山旅であつた。

（2）ローカルバスの旅

10月1日

トレッキングを終えマナリで1日休養した

あと、後半戦のローカルバスの旅に出た。5時のバスに乗るため、ホテルの玄関のシャッターを特別に早く開けてもらひバス停に行く。暗い中、バス停には既に10人位の客が力ザ行きのバスを待っていた。熱いミルクティーを飲みながら待つてみるとバスが来た。バスには既にかなりの乗客が乗っていたが、素早く乗り込んだおかげで、前から2列目という景色を見るには絶好の席が確保できた。

バスはマナリを出た後ロータンバスを越え、バタルで昼食休憩、その後、本日のハイライト、クンザムバス（4551m）の登りにかかる。満員のおんぼろバスでは登れないのではないかと心配したが、バスは九十九折りの急坂を喘ぐようにして登り、なんとか登り切った。クンザムバスを越えると景色が一変してスピティの谷に入る。スピティ谷はバラシグリ氷河最奥の山に続く山脈と、チベット国境の山に続く山脈の5、6千メートル級の山々に挟まれた大きな谷である。両側の山には、ほとんど雪が付いておらず、流れも谷幅に較べて水量が少なく、赤茶けた大地には緑がほとんど無い、荒涼とした景観を呈している。

バスはスピティ河に沿って下り、16:30にカザに着いた。11時間強バスに乗つたことで一日仕事になるかと覚悟していたが、あ

なるが、ローカルバスだと10時間を越えると、やはりちょっとつきつい感じがする。カザはスピティ地方の中心の町で、立派な寺院の他に役所やホテル、商店などが建ち並ぶ人口4千人の町。標高は3700mあり、バスが給油で寄つたガソリンスタンドには“世界最高所の給油所”という誇らしげな表示があつたのが、印象的であつた。

10月2日

インナーライン・パー・ミットを取ろうと思つたが、今日はガンジーの誕生日とかで役所は休日。仕方が無いので観光に当てる。タクシーでカザから12km離れたキ・ゴンパに行つてみる。キ・ゴンパは、険しい岩山の上に建てられた要塞のような建物で、スピティ地方最古かつ最大のゴンパと言われるだけあって規模も大きく見えたものであつた。

10月3日

カザの役所は10時に開くというので、それに合わせてインナーライン・パー・ミットを取るために治安判事事務所に行く。予め用意した申請書とパスポートコピーと写真2枚を差し出すと、何の質問を受けることもなく、待つこと30分でペーミットを受け取ることができた。過去の経験から、インドの役所相手なので一日仕事になるかと覚悟していたが、あ

まりの簡単さに驚く。これもインドの近年の規制緩和の為せる故か、それともインナーラインの壁が低くなつてゐるせいか。いずれにしてもインナーライン・パー・ミットを入手すれば、これ以上カザに止まる必要はないので、速やかに次の目的地、タボに移動することにした。調べたところ14時発のバスがあるが、それだとタボに着くのが夕方になつてしまい、観光の時間が取れないので、タクシーで行くことにした。タボまで47km、1500ルピー（2250円）払つてタボに着いた。宿を取つた後、タボゴンパの見学に出かけた。タボゴンパは、西暦996年に建てられたもので、僧院内部の壁画で有名であるが、確かに7棟ある僧院の壁いちめんに描かれたマンダラの絵はカシミール風あり、チベット風ありで、いずれも圧巻であった。驚いたことに、ここで中国人の一人旅の若い女性に会つた。

10月4日

カザ発レコンピオ行きのバスが9時から10時の間に来るというので、バス停に行つて待つてみると、9:30ちょっと過ぎにバスが來た。バス停には7、8人の客が待つていたが、ここでも素早く乗り込み、なんとか二人分の席を確保した。しかしながら最後尾の席であつたため揺れが激しく、このあと9時間のバスの旅にはかなりつらいものがあつた。た

だ、昨日ゴンパで会った中国人の女性は席が取れず、2時間くらい立つたままであつたし、途中から乗り込んできた欧米人の男性は、5、6時間立つたままで、しかも頭が天井につかえるため、首を曲げたままの姿勢を保たざるをえなかつたので、さぞかしつらかつたにちがいない。それに比べれば我々は座れただけでもよし、としなければならない。バス道は最初はスピティ河に沿つた比較的平らな道であつたが、進むに連れだんだんと左右の山が迫つてきて、岩をくり抜いたようなスリルがあふれる所が多くなる。さらに進みスピティ河がサトレッジ河と合流するあたりになると大峡谷地帯となり、ゴルジュを避けるために道は数百メートル登りまた数百メートル下るという壯絶な道となる。この辺りは、第2次大戦中「セブンイヤーズ・イン・チベット」の主人公、オーストリアの登山家ハイインリッヒ・ハラーが、デラドンの捕虜収容所を脱走してチベットに抜けた時に越えた有名なシブキ峠の近くで、彼はどうやつてこのゴルジュ帶を越えたのかと思うと、いやがうえにも想像が膨らんだ。大峡谷帶の手前のスマドという所と、大峡谷帶を抜けたジャンギという所にチエックポストがあつたが、いずれもインナーライン・パーミットを見せると問題なく通過できた。ジャンギを過ぎる頃から谷が開

けて緑も多くなつてきて、ようやくキナウルに入ったかという感じになる。さらに進むと行く手にキナウル・カイラスと思われる白い大きな雪の山が見えてきて、レコンピオに着いた。レコンピオは、キナウル地方の中心地でメインストリートには商店やホテルが軒を連ねるかなり大きな町であった。

なお、バスがレコンピオの町に入った時、急に車窓に街並みが現れたので、隣に座つている乗客に「レコンピオか」と聞くと「そうだ」という。てつきり終点がレコンピオだと思つて安心して乗つっていたので、これを聞いて慌ててバスから飛び降りた。そしてバスの屋根の上に載せている二人のバッグを降ろすために、中村氏に屋根の上に登つてもらつたが、バスの運転手が「早くしろ」と急かすためにバスを少しずつ動かすので、中村氏は屋根の上に乗つたままバスが発車してしまうのではないかと、大いに焦つたようであった。こういうことがあるので、大きな荷物を持つてのインドのバス旅行は厄介である。

10月5日

レコンピオにもう1泊して、キナウル・カ

イラス（6050m）が良く見えるというカルパ村に行つてみることにした。バスとタクシーを乗り継いで着いたカルパ村は、標高2960mのリンゴの木に囲まれた気持ちのいい所で、村の至るところからキナウル・カイラスがよく見える。この山は、チベットのカラスから冬の間だけシバ神が下りて来て過ごすという伝説のある山だけあって、氷河の発達した立派な山容の山である。ビューポイントを求めて歩いて行くと、村の先端に小学校があつた。ちょうど生徒が校庭に集まり朝礼のような事をやつていたので、しばらく興味深くそれを見学した。その後、学校の隣にあるゴンパに行つてみた。このゴンパは建物そのものは火事で焼けたため立て替えられたので、それ程古さを感じないが、壁に掲げられた説明を読むと、そもそもはタボのゴンパとほぼ同じ時期に同じ僧侶によつて創建されたもので、由緒のあるものの由であつた。村を散策した後、帰りはゆっくりバス停まで歩いて下り、バスでレコンピオの町まで戻つた。

10月6日

早朝（6:15）のバスでシムラに出るべく、バス停でバスを待つていると、ほぼ定刻通りにバスが来た。バス停で待つてゐるインド人の客から、バスはセミスイートだと聴いていたので、どんなバスが来るかと期待していたが、実際に来たバスは、とてもセミスイートとは言えない古いバスであった。それでも座席だけはリクライニングで、普通のバスに較べて多少ゆとりがある。バスは思いのほか空

いていたので、ザックを持ったまま乗り込んで、中ほどの席に座ることができた。レコンピオからシムラへの道は、サトレッジ河に沿つて下る道で、所々ゴルジュ帶で岩をくり抜いた緊張する箇所はあるが、一昨日までの道に較べれば道幅も広く路面もいいので、気楽に乗つていられる。車窓には4、5千メートル級の山並みが続いているが、スピティの岩と雪の山とは違つて草木に覆われた緑の濃い山であるため、眺めても心が癒される感じがする。16:15 シムラ着。3年前の記憶

では、バス停の近くにホテルがあつたと思つていたが、着いてみるとバス停の周りにはホテルも民家も無い。仕方が無いのでタクシーでモール（シムラの中心地）近くに行つてホテルを探すも、適當な値段のホテルが無い。夕やみ迫る中、重いザックを背負つてあつちこつち歩き回つた末、ようやくモールストリートで手頃なホテルを見つけて落ち着くことができた（後で判明したことだが、シムラにはバススタンドが近距離バス用と遠距離バス用の二つがあり、記憶にあつたのは近距離バス用のものであつた）。

10月7日

11:15 発のバスでシムラからデリーへ。昨日ホテルに着いて直ぐにホテルのマスターに頼んで予約してもらつたお陰で、VOLVO

デラックスバスの座席が確保できた。ゆつたりと座つて25年ぶりの車窓の景色を楽しみながらデリーに帰る。20:05、バスがデリー郊外のターミナルに着いて、6泊7日、総延長870kmのバスの旅を終えたが、タクシーでトレッキングに出発する前に泊まつていたホテルに戻る途中、車窓から見えるホテル街の雜踏がやけに懐かしく感じられた。

(3) 学生の遺体捜索協力要請

9月17日

マナリの登山学校 (Atal Bihari Vaipayee Institute of Mountaineering and Allied Sports) に行って、ダイレクターのサルフリア氏に面会。学生の遭難当時の状況を説明し、将来遺体が発見された場合には連絡してほしい旨お願いする。そして予め作成して持参した“NOTICE”（末尾参照）を渡して、構内の人目の付く場所に掲示してもらいうよう依頼した。同氏はホワイトセールの遭難については全く無知であったが、当方の依頼については快諾してくれた。また同氏との面談の中で、遭難当时、C1までヘリで飛んで捜索に協力してくれた、教官のマハビール・タクール氏が副ダイレクターに昇進し、まだ登山学校にいることが分かつたので、早速、彼の部屋に行つて同様のお願いをした。マハビール氏は遭

難当時のことによく覚えていて、定年まであと3年は登山学校にいるので、その間、少しでも参考になる情報があれば連絡すると、力強く約束してくれた。さらに同氏は、遭難當時マナリを訪れた金子晴彦氏（44年）や中村君の父君のことを懐かしがついて、突然の訪問にもかかわらず我々に対しても始好意的、最後には近くのピザ店でピザとケーキまで駆走してくれたうえに、車でマナリの町まで送つてくれた。

登山学校を訪ねた後、州の観光情報センターに行き尋ねたといふ、マナリに旅行代理店協会 (Travel Agent Union) なるものがあることが分かつた。事務所も近くなのでその足で訪ねてみると、幸い会長のアニル・シャルマ氏がいたので、同氏に“NOTICE”を渡して会員に広く回付してくれるように依頼した。なお、マナリでは、上記2機関のほかに地元の警察にも同様の依頼が必要だとは思ったが、訪問している時間が無いので、こちらについては、今回トレッキングの手配を担当したエージェントのマネジャー、フツカム氏を通じて“NOTICE”を渡してもらいうよう依頼した。

10月8日

インドの山の登山許可を発給する機関に、インド登山財团 (Indian Mountaineering

Foundation) という機関がある。インドの山の情報が最も集まる所と考えられるので、出発前に訪問のアポを取るべくインターネットでメールアドレスを調べて、2度もメールしたが返事が無い。しかたがないのでダメもとで訪問してみた。受付でダイレクターに会いたいと言うと、受付嬢が部屋に案内してくれて、すんなりとダイレクターのJPバガツジー氏に会うことができた。当方から遭難の経緯を説明し、遺体発見の情報が入つたら連絡してくれるよう頼んだところ同氏は「情報が入れば連絡するが、それよりも自分達で捜索隊を出した方がいいのではないか。その場合には速やかに許可を出すから」と盛んに勧めてくれた。当方としては、自分達で捜索隊を出す余裕がないので、今後ホワイトセルを目指す遠征隊があれば、我々の意図を伝えて、登攀中も注意深く周囲を観察してくれよう、IMFから積極的に働きかけてくれないか、と虫のいい事を考え、図々しくも頼んでみたが、明確な返事は得られなかった。どうやらそれは無理のようであった。なお、登山財団の構内でたまたまインド・ネパール合同登山隊の一員としてカメット峰から帰つて来たばかりのネパール人隊員、B・ムケルジー氏に出会つたので、雑談ついでに遺体搜索の話をしたところ、「自分達で大規模な捜索の話をしたところ、「自分達で大規模な捜索

索隊を出す人的余裕がなくとも、2、3人の隊員がいれば、あとはネパール人を使って捜索することは可能だし、費用も安く抑えられる」とアドバイスしてくれた。こういうアイデアは今まで思いもつかなかつたが、将来、針葉樹会としても検討の余地があるかもしないと思つた。

旅費内訳 換算レート：1Rs=1.5円、1元=14.5円

項目	金額	備考
航空賃	63,570円	中国東方航空
ビザ代	2,135円	インドビザ
トレッキング代	67,625円 (45,083Rs)	トレッキングエージェントへ 支払い 3,640Rs×12日
宿泊代	14,118円 (8,345Rs+1,600円)	18泊
食事代	18,305円 (10,850Rs+140元)	18日分の飲食代
交通費	10,885円 (5,461Rs+51元)	バス、タクシー、鉄道、地下鉄、 リニア等
その他	8,545円 (5,030Rs+1,000円)	観光、チップ、
計	185,183円	

(備考)

年金生活者にとっては、支出は少しでも少ないほうがいい。今回の旅でも格安航空券を利用したり、複数のトレッキング・エージェントから見積もりを取つたり、現地では極力公共交通機関を利用して、節約に努めた。その結果、アグラへの一泊二日のタージマハル観光と上海での観光を含めて一ヶ月間の旅費総額を19万円以下に抑えることができた。

添付資料

NOTICE

In 1981, Three Japanese Students of Hitotsubashi University Alpine Club(HUAC) went missing when climbing on the south east ridge of Mt. White Sail. It seems that they have fallen into either White Sail glacier or Tos glacier by accident. They are still missing.

Now that more than 30 years have passed, we are expecting that it is about time when they could be found in the glacier.

Please inform us if you find something presumed to be their remains or belongings. We would also deeply appreciate it if you would give us any relevant information.

Thank you for your cooperation.

Sep.2012

HUAC

Incharge : Hisanao Sato

5-30-10 Funabashi Setagaya-Ku Tokyo, Japan

Tel & Fax : 00-81-3-3304-5650

E-mail : NQJ26703@nifty.com

「山恋しくて鳳凰三山」

—昔、山ガールが作った歌

上原 利夫（昭30年卒）

昨年暮に、25年ぶりに会社の山の仲間たちと一夕を過ごした。男女半々16名。もう50代の壮年。いつまでも明るく元気だ。女性は子育てをほぼ終えて、上の子は大学生になつている。当時はわたしも50代で、まだこんなに若かったのだ。彼らとよく山へ出かけた。その頃に合作された歌「山恋しくて鳳凰三山」が披露された。

ハ長調4分の4拍子のリズミカルなこの歌が、25年後のいま、鳳凰三山を歩く山ガールの口から流れたら、という夢が湧いてきた。よし工夫しよう。尾瀬の「夏の思い出」のよううにしたい。

鳳凰三山への道は、甲府からバスで芦安へ。丹下健三が設計した南アルプス芦安山岳館には、われらが寄贈した「針葉樹文庫」など山の蔵書があり、登山の展示も楽しめる。折角だから温泉付きベンションに一泊して、朝早くから

くから夜叉神峠へ登ると、正面に白峰三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）が姿を現す。ここから西へ鳳凰三山（薬師、觀音、地藏）への尾根歩きが始まる。山恋しくて鳳凰三山（作詞吉田治美・加藤富士子、作曲加藤富士子、編曲山根妙子）を口ずさみながら……

一人恋しさをザックにつめて

集うワンダーフォーゲルたちよ

都會の冷たさを逃れてくれれば

木々がさざめく夜叉神峠

二 孤独かみしめ歩を踏む朝（あした）

我に満ちくる郷愁胸に

行く手大きく目を上げたなら

白峰三山 我が思いはせ

三 宴もはてぬ 夜氣求めて

一人星空のぞむ時

影なすアルプスの しんしんとして

耳に心に山の声

初めに

約8年前に富士箱根国立公園の山中湖の古い別荘地内にある中古ログハウス（以下「山小屋」）写真）を入手し、以来月1～2回の週末や夏休みをそこで過ごすようになりまた。山の楽しみ方が発展してこうなった訳ですが、ときどき受ける「そこでなにをするのか」などの質問にこたえる意味も兼ね以下に山小屋生活の動機や楽しみを紹介します。

風は西風 五体をぬけて
たぎる血潮にふるいたち
前へ進むと心決めたら
空に聳えるオベリスク
丹下健三が設計した南アルプス芦安山岳館には、われらが寄贈した「針葉樹文庫」など山の蔵書があり、登山の展示も楽しめる。折角だから温泉付きベンションに一泊して、朝早くから

わたしはこの楽譜を音楽の先生に見せて曲を教えてもらった。味わいのあるメロディである。これならいける。その広め方を研究しよう。これが今年のテーマである。いい知恵があれば教えてください。

週末山小屋生活のすすめ

佐藤 活朗（昭53年卒）

動機

40代にさしかかった頃、将来はハードな山

登りは続けられなくなるだろうし、子どもが

があつて着手が遅れ、結局51歳になる直前の2005年秋に今の小屋を手に入れました。

投資額を最小限に抑えるため公有借地の中古物件にねらいを絞り、初めのうちは八ヶ岳山麓を見て回りましたが、自宅のある神奈川県からの週末往復には八ヶ岳は遠すぎるのでより近いところに目を向けた結果、丹沢の先にあつて少年時代からなじみのある山中湖でイメージに合う物件に当たり購入しました。



私の小屋は籠坂峠の西約1・5km、高度1

100mのブナや松などの樹林の中にあります。落葉した冬期には、デッキから御坂峠の

向こうに白く国師岳・金峰山が遠望できます。

自宅（横浜市）から車で渋滞がなければちょうど1時間30分、横浜や新宿から高速バスを利用したり、御殿場線（バスを乗り継ぎ籠坂峠から歩いていく（徒歩20分）こともあります。夏涼しく冬は晴れの日が多い、買い物などが便利（永住者も多い）、比較的観光客が少なく静か、周辺にハイキングコースが多い、などが気に入っている点です。

山小屋生活の実際

その後、インターネットでDIY山小屋生活を実践している例を参考にしたりして、「日常生活の一部として自然の中のシンプルな環境で心身とともにリフレッシュする」というイメージを固めましたが、一度の海外勤務

の山小屋はいつ来て／帰つてもよい、何をしても／しなくともよいという気楽さがある反面、諸事DIYが原則です。最初の一年程は行く度に各所の手入れ作業で過ぎていたが一通り終わり、最近では適当に、下記のようなことをしたりしなかつたり、のんびりと過ごします。なお、1～2月は最低気温がマイナス10度くらいになりますが、薪ストーブ一つで家中が十分暖かくなります。

○小屋からでかける：山歩き、ウォーキング、サイクリング、温泉、湖でのカヤック、周辺の観光など。

○小屋でする：建物敷地の作業、野鳥や植物の観察、棚や巣箱などの工作、料理、焚火の宴、読書（近くに充実した村営図書館がある）など。

定期的な作業としては草刈り、落ち葉かき、樹木の伐採・薪作り、薪ストーブ本体煙突の手入れ、防腐塗料のペイント、各種の修繕など。こうした作業は達成感があり、刈払機、チエンソー、鉈などの道具の使い方、刃物の研ぎ方、ペイントの技術などを覚え次第に習熟していく楽しさは登山と共に通るものがあります。

8年を振り返って
季節毎に経験を重ねて各種作業にも慣れ、

山小屋生活を楽しんでいます。この趣味は自分の性格に合っているようです。なお、妻は彼女が苦手な寒い時期を除き、都合がつけば一緒に来てくれます。山小屋道楽は今までさんざん心配させられた山登りに比べれば安心だし、二人で楽しむ時間も充実する、と前向きに理解してくれているらしいのはありがたい限りです。ちなみに妻の過ごし方は、小屋周辺の散歩、読書、トルルペインティング、湖畔のケーキ屋さんでのショッピングなど。小屋に行くと私のほうが出不精です。

一方、山小屋生活導入の副作用は、予想していたことですが山中湖周辺以外の山登りにあまり行かなくなつたことです。これは休日を山小屋で過ごすことが増えた、3年前に新たな仕事に就いたため自分の時間が少なくなつてしまつたという物理的理由に加え、山への渴望が山中湖の自然でとりあえず満たされるためでしょう。ただ、まだ登りたい山は多いのでもう少しバランスを是正して山にも行き、近い将来仕事を離れて自由になつたら山小屋にもつと長く滞在したいと思つています。

以上私事を書き連ねましたが、山に関連した話題ということでご容赦ください。よろしければ一度、富士のふもとの森の中にある、私の山小屋へお越しください。

会務報告

90周年記念事業実施報告

小島 和人（昭40年卒）

昨年6月針葉樹会総会で承認されました90周年記念事業の本年度分は会員各位のご協力を得て所期の目的を達成し終了しました。会報125号に続き概要を以下にご報告いたしますが、記念事業の検討段階で議論がありましたように富士登山、夜叉神峠周辺の登山道整備については、趣旨達成のために今は後数年継続する必要ないと判断され、関係者で検討し総会に諮りたく存じます。

すなわち「針葉樹15号」の発行により最近の4半世紀の一橋山岳部の活動を振り返り、山岳部の母体である大学・現役学生との絆そして小谷部先輩以来の芦安との絆を深める活動を会員が協力して取り組む機会を作る。その事によつて百周年に向けて針葉樹会の会員の年代を超えた交流を強くしたい」というのが基本的考え方であったわけで、その趣旨を実現するため、次年度以降何らかの継続活動を90周年記念事業推進委員会を中心にして検討してまいりたいと思つています。

一、富士山登山（幹事：宮武幸久 昭45年卒）

前回報告の通り一般学生11名、山岳部員5名、針葉樹会9名が参加して8月5日、6日に実施されました。詳細は針葉樹会報125号並びに会のHPをご覧ください。山岳部の存在が広く認識されましたが、「もし次年度も実施となれば学生主体で推進したい」と学生も話しており、実施する場合は広報活動をより有効に実施する必要があると考えています。

二、芦安活性化のための夜叉神峠周辺旧道復活

（幹事：本間浩 昭40年卒）

28ページの岳人記事等に見られるように関係者の協力で芦安トンネル東口から桧尾峠への旧道が復活しました。旧道の修復工事は6月16・17日、7月23・24日および10月21日の5日間実施され、延90名（針葉樹会29名、芦安ファンクラブ31名、南アルプス市の富士通アイ・ネットワークシステムズ30名）が参加しました。まずは丸太・鉄杭・番線・カスガイなどを担ぎ上げ、それらの資材を使つて、ファンクラブの清水専務理事の指導で、道を削つて階段を作り、旧道を掘り起こ

して幅を広げ土の流失を防ぐ木材を敷設、危険な箇所には柵を設けました。チエーンソーが使える井草会員（昭48年卒）、佐藤活朗会員（昭53年）を除いて、針葉樹会員は全くの素人ですが、毎日約7時間、体力を頼りに熱心に汗を流しました。もう少し連絡を良くして、若手・中堅の針葉樹会員に参加して貰いたかったというのが反省点です。富士通アイ・ネットワークシステムズ㈱は南アルプス市に本社を置き、芦安出身者を纏め役にボランティアで実によく働いてくれました。フアンクラブも地元の作業に慣れた頼りになる皆さんのが参加してくれて3つのグループが阿吽の呼吸で作業を効率良く進めました。

10月21日の作業で芦安トンネル東口から

檜尾峠間の修復が出来、10月27日には、竹中会長のご報告の通り針葉樹会18名現役学生2名に芦安ファンクラブ富士通関係者が加わり計28名で完成した夜叉神登山口→夜叉神峠→高谷山→檜尾峠→修復道→登山口と4時間半をかけて周回路のお披露目検分山行を実施いたしました。参加者の感想としては、せつかく周回路ができるが、
①従来からある高谷山→檜尾峠間の整備が出来ておらず歩き難く危険でさえある。
②眺望最高のシラビソ平への道の整備は今後どうするか？

という2点につき多くの意見が出ていました。下山後、芦安ロッジにて修復道の完成祝と作業の慰労を兼ねて祝賀会が開かれ、竹中会長の謝辞の後、芦安ファンクラブの清水専務理事、富士通アイ・ネットワークシステムズ㈱河田社長、南アルプス市観光課三井係長の挨拶と続き差し入れのワイン・焼酎などで盛り上がりました。
まだ一部とはいえ修復は出来ました。しかし使われなければ山道はすぐに自然に飲み込まれます。会員の皆様も是非ご友人にお話頂き現地の周遊をお楽しみください。

三. 針葉樹15号発刊（幹事 岡田健志 昭42年

卒、中村雅明 昭43年卒）

幹事の大変な努力により、1985年から2012年までの学生の記録が集められ、予定通り昨12月、会員の皆様に届けられました。今回の針葉樹は90周年記念号として、中村保会員の特別寄稿さらに金子会員による写真館、中村（雅）会員による年表など、山岳部の90年の歴史を締めくくる充実した内容となりました。当初200冊の発行予定を、内容から配布先が増加、350冊印刷致しました。会員・学生148冊、他大学など外部団体146冊配布しました。送料・税を含め899、287の費用でしたが、会員のご協

四. 予算と実支出

90周年記念事業の予算は、富士登山20万円、芦安プロジェクト30万円、針葉樹15号発行80万円で承認頂きました。結果として、富士登山はほぼ予算20万円内、芦安プロジェクトは予算以上に労力を必要とし、その昼食弁当代などで約7万4千円の予算超過になりましたが、復活道のお披露目に参加いただいた会員の贊助金4万4千円及び、針葉樹15号関連の剩余金3万円でまかなう事が出来ました。詳細は6月の総会にてご報告いたします。

■月見の宴が開催されました

11月3日、恒例の「月見の宴」がささやかに行なわれました。暗くて良く分かりませんでしたが、事前の部室周囲の草刈ご苦労様でした。
月見の宴は、学校当局、一橋祭委員会の厳しい規制の目でキヤンバス内アルコール厳禁が徹底し、例年のような盛り上がりには欠け

力も得て13万円の広告収入を頂き、十分に賄うことができました。

ましたが、現役部員も小宮山部長、町田さん、川尻さんの参加で（終り近くに2年の細川さんも）、OBとの話し合いも出来て有意義だったと思います。

来年の新入生勧誘についても力強い言葉があり、頼もしく感じました。また、「山讚賦」の指導も少し出来たと思いま

す。

参加の前神さん、宮武さん、井草さんお疲れ様でした。席上、隣の空手道部・OB会と学校当局との衝突等について一空会（OB会）から届いた経過説明と今後の対応に関する手紙を元に意見交換した。現在の山岳部には体育会等からの情報が余り入っていない様なので、早急に体育会総務とコミュニケーションを図ること、今回の空手道部の処分等に関する学校当局（学生支援課）の規則（OBと現役の学内での交流については事前届出必要？等）を確認する必要がある等。

前神学生担当幹事は、一橋祭の時期を外して過去のような「宴」を行ないたい意向のようですが、時期に拘わらず、今後とも学内の飲酒については厳しい対応が考えられます。来年春の新緑の宴についても、今後の学校側の対応を注視しながら検討する必要があります。

（竹中 彰）

■新年会に寄せられた 会員の近況

特別 鈴木 羊三 相変わらず、日医者をやつております。

昭23年 大島 理則 昨年末から、居住している町内会ならびに港区関係団体等の役員会の夜の会合は欠席、年令を考えれば致し

方ない、と考えたうえでするので悪しからず御了承下さい。盛会であることを祈ります。昭28年 伊藤 慎生 家の人から夜間外出禁止となつております。出来るものなら平日の昼間にしていただきたいと思ひます。

昭28年 中村 正司 S28卒の会（中樹会）では時折再会しています。4～5人は皆元気で集まっています。（戦後の時代で、前後の関係に余ゆうなく卒業してました）

昭28年 渡辺 幸信 「父、渡辺幸信は平成24年10月25日に亡くなりました（享年81才）。大学卒業後は富士銀行に入社し、仕事ひとすじの父でした。しかし、銀行を定年退職後は山歩きを再開、念願の日本百名山登頂を達成するなど、充実した生活でした。

高齢になり山登りをやめてからも、母と夫婦で自然を楽しみつつ温泉旅行など楽しんでおりました。亡くなる前日まで自宅で家族と過ごし、幸せな一生をおえることができました。最後になりましたが、会のますますのご発展、会員の皆様の健康とご活躍をお祈り致します。長い間ありがとうございました。〒235-0045横浜市磯子区洋光台4-9-22 渡辺陽子（長女）

昭31年 鈴木 克夫 22日の新年会は欠席とさせていただきます。遅くなりましたが小生ネットに加わっていませんので、12月



7日のメールは見ていませんでした。

昭31年 尾身 幸次 S T S フォーラム（科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム）の為、一年の1／3海外出張に出でております。週末はもっぱら天風会の講演を日本各地でしております。

昭32年 岡 悅郎 お世話になります。大変不義理致しており申し訳ありません。肺気腫の持病あり外出は控えていますので、欠席とさせて頂きます。ご盛会をお祈り致します。

昭33年 中村 保 イランに出かけるため欠席します。

昭33年 宮川 守久 先日は、針葉樹の創部90周年記念、第15号有難う御座いました。大変読み応えがありました。最近は足腰が弱りましたが、一応元気に致しております。

昭33年 新井 慶司 今年は、12月23日に、80才となります（天皇と同じ）。毎日やることが多く、忙しく、元気で過ごしております。高齢なので、東京での夜の会合は、原則として、差し控えております。針葉樹会のご盛況おめでとうございます。皆様に宜しくお伝え下さい。祈、皆様のご健勝、ご活躍！！

昭33年 丸山 則二 重い病気ではないの

ですが年初めから頭痛が続いておりいずれ治ると考え先メールで新年会に出席出来ると思ふ旨返事をしましたが、その後も改善せず医師に相談したところ薬を処方され飲み始めました。医師によると服用期間は長引く可能性があるとの事であり、また薬の関係で夕食を9時前どどことが出来なくなりアルコールも禁止されてしまい、新年会への出席は今回見合わせたいと考えます。お手数をかけて申し訳ありませんが欠席扱いに変更願います。

昭33年 加地 幸雄 2012年は山行日数50が的でしたので、恵まれました。圧巻は八月末ワイオミング州風川山系(Wind Rivers, 通称“Winds”)一週間の山旅でした。

此の山系は、北米大陸分水嶺をなすロッキー山脈中の白眉で、州の西側を西北東南に走ること180km、幅60km、富士山より高い山々百余座が峻を競い、氷河が残して行つた湖二千が点々とする地上の天国です。山小屋が無いので、一週間の山旅は、かなりの重荷になりますが、新年も此の神殿の御詣りを志しています。同志の方は連絡して下さい。御花畠には少し遅れますが、八月末九月上旬が適期で、当地（ユタとワイオミング）で十日間から十二日間ほど見込んで下さい。新年会は欠席しますが、盛

ですが年初めから頭痛が続いておりいずれ治ると考え先メールで新年会に出席出来ると思ふ旨返事をしましたが、その後も改善せず医師に相談したところ薬を処方され飲み始めました。医師によると服用期間は長引く可能性があるとの事であり、また薬の関係で夕食を9時前どどことが出来なくなりアルコールも禁止されてしまい、新年会への出席は今回見合わせたいと考えます。お手数をかけて申し訳ありませんが欠席扱いに変更願います。

昭34年 市川 陽一 謹賀新年！ S 34年卒の市川陽一です。返事遅れて申し訳御座いません。当日は欠席でお願ひ致します。毎度欠席で申し訳御座いません。近況ですが、今まで通りです。比叡山の麓に住して35年になります。自宅が言わば「登山口」に等しい便利な処でいつも簡単に「京都北山」に入れますので毎月4、5回は山に入っていますが、去年の9月アメリカの山で無理をした為帰国寸前に足／腰立たなくなり救急車と救急病院の世話になつた時に様々な注射（特効薬？）を施されました（そのお蔭で帰国出来たのですが）為、それ以来脚のしびれが酷く今に至る迄山に入るのを自重しています。「回復」を祈願している昨今です。又例年、5月、7月と9月はアメリカの山に出かけています。今年もその予定ですが、年々身体の調子がおかしくなつて来ていました（左様な年になりました）ので、今の所未定です。身体の状態次第です。どうぞ皆様に宜しくお伝え下さい。

昭36年 石 弘光 22日の新年会は、あい

にく先約があり失礼します。日程調整で時間がかかり、遅くなり失礼します。

昭36年 小林 正直 車椅子で街中駅からハイキングを楽しんでいます。

昭36年 三股 宏 残念ながら山に登る事

はほとんどなく、代りにスポーツクラブに行き、その間にゴルフ、囲碁をやっている毎日です。ゴルフは90～100の間、囲碁は、7段昇格はプロの指導基準で6連勝が条件で12月に5連勝し6連勝に挑戦しましたが敗退、再起を期しています。

昭38年 高橋 信成 当日別件の予定があり、欠席とさせていただきます。

昭39年 蝶川 隆夫 ひよんなことから2月にキナバルに行くことになりました。それに備えて、左膝痛の治療に努めています。このところ北海道考古学にますますはまっています。

昭39年 竹中 彰 引き続きJA東京多摩支部中心に山行を続け、メトロ会世話人として他大学のOB方との交流を行なっています。本年スタートした多摩支部主催の「初心者登山教室」やその修了者対象の「初級登山教室」の座学では他大学山岳部出身のベテラン講師の下で昔の高校、大学山岳部時代に体得した山歩きの基礎を復習しています。先日東大TUSACのOB会「山の

会」会報が送られてきましたが、東大でも本年4月に5名の新人を迎える、その育成に色々工夫をしているようです。夏前にはOBが講師となって基礎知識、技術の座学を7回程度実施し、夏合宿は涸沢で学生4名、OB9名（出入りあり）で定着（雪上、岩登り基礎）後、槍ヶ笠縦走を行なった様です。その活動の財政的裏付けとして、OB会のTUSAC特別会計から再建費用として3百万円の支出が提案承認されています。一橋の現役も山岳会学生部に出入りすれば色々の情報が得られると思いますが、なかなか忙しいようですね。

昭39年 中橋 寿雄 足腰の不調（歩くと右脚が痛む）改善のため、1～3月は某病院の整形外科、9～12月も別の病院のペインクリニック外来で治療を続けていますが、未だにいい結果は出ていません。それ以外は快眠・快食・快便の毎日で、絵や楽器や晩酌を楽しみ、それなりに何とか自適しております。盛会をお祈りします。

昭40年 三森 茂充 H25年度会費を針葉樹会三菱東京の口座に振り込みました。

昭41年 坂井 益弘 今年は年男なので賀状に「脱皮の年」を目指します、と書いたところ ①脱皮後の形状を具体的に示せ、とか②もともと「皮しか残っていない年寄

り」が脱皮したら——さあ、どうなりますか？——面白そうだね……とかの学（岳）友のご批判を戴きました。——多難そくな年明けですが、頑張ります——ご盛会を祈ります。

昭41年 池知 昭洋 当日は仕事の予定が入つており出席できません。元気で変わらずはたらいております。皆様元気でいてください。

昭42年 齋藤 正 ご返事おくれて誠に申し訳ありません。諸事立て込みまして、調整あたわず、欠席とさせていただきたく。なお、お手数ながら、総務の方に措かれましては、会費や賛助金などの金額、支払先などご連絡くだされば幸いです。今年度は少ない余力をボランティアに……と思つております。

昭42年 吉川 晋平 先約があり、参加できません。盛会を祈ります。

昭42年 田沼 行雄 ご案内ありがとうございます。「欠席」にてご回答申し上げます。

昭43年 中村 雅明 インドヒマラヤ旅行の疲れ、針葉樹第15号の発行準備などで山

が遠ざかりましたが、11月から再開しました。年末年始～来年、頑張ります。

昭48年 井草 長雄 小河内ダムと奥多摩

駅の間を結ぶ「むかし道」を地元の物知りじいさんと二人で歩くことを始めました。同じ道を毎月歩けば、草木や動物のことがわかつてくる、というのがおじいさんの教えです。

昭51年 加藤 博行 連絡遅れてすみません。

ん。平日ですので、新潟から参加難しく、欠席とさせていただきます。この冬は気象庁の予報が見事にはずれて、新潟も震え上がっています。雪の量もまだまだこれから増えるでしょう。春の登山が少し遅くなるかもしれませんね。盛会をお祈りします。

昭52年 兵藤 元史 22日の新年会ですが、業務と重なりそうで調整をしておりました。お返事が遅くなつて申し訳ありませんでした。結局調整がつかず、大変残念ですが、欠席致します。ご容赦下さい。皆様によろしくお伝えください。

昭53年 松田 重明 矢張り仕事が入つてしましました。新年会は欠席致します。皆様に宜しくお伝え下さい。

昭53年 佐藤 活朗 このところ仕事と介護のためオフの遠出が難しいですが、徐々に回復していくつもりです。

昭55年 米田 篤裕 22日の新年会ですが、先約があり残念ながら参加できません。盛会を祈念しております。また針葉樹15号

を拝見しました。幹事の皆様の労に感謝致します。

昭56年 中西 茂 1月22日は別件あり、出席が叶いません。皆様のご健勝をお祈りしております。

昭56年 小林 修 最近は堕落して山には登つておりますが、剣道にすっかり嵌つております。「生涯剣道」を実践すべく心身ともに健康でありたいと思っています。

昭59年 稲毛 尚之 ご返答が漏れており申し訳ございません。神戸在住のため出席できません。新年会のご盛会と皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。

昭60年 石丸 義男 すいません、先約有り、下記の通り欠席させて戴き度存じます。盛会を祈念申し上げます。

昭60年 五ヶ山 淳 申し訳ありませんが、新年会につきましては欠席させていただきます。よろしくお願ひいたします。

昭63年 川名 真理 22日は仕事の予定があり、出席が叶いません。残念です。みなさまにも、どうかよろしくお伝えください。

ご盛会をお祈りしております。

平6年 田形 祐樹 伊勢神宮のお膝元になります。なかなか東京に出る用事もなく、みなさんとお会いできていなくて、さびしいです。私は、熊野古道歩きをしていますので、計画があるかたは、メールください。一緒に計画立て、行きましょう。あと、Facebook もやってますので、見つけてみてください。

平8年 渕沢 貴子 新年会ですが、北海道在住ですので、当然欠席です。よろしくお願いします。

平15年 山田 秀明 昨年、足の指を凍傷にしてしまい、今年はスキーがレンデ程度で様子見ですが、子供も1歳となり、スキー場のそり遊びに付き合うにはちょうどいい感じです。また、機会があれば参加したいと思います。その際はどうぞよろしくお願ひします。

平15年 山田 秀明 昨年、足の指を凍傷にしてしまい、今年はスキーがレンデ程度で様子見ですが、子供も1歳となり、スキー場のそり遊びに付き合うにはちょうどいい感じです。また、機会があれば参加したいと思います。その際はどうぞよろしくお願ひします。

■ 計報

会報お礼と共に昭和16年卒の深谷光茂さんの計報ハガキが届きました。文面からは2012年7月3日に92歳で逝去されたとのことです。差出人は、奥様の深谷千代さんです。

■ 台北での講演

仰臥や中國でも、ヒマラヤの東、に涉田

中村 保（昭30年卒）

今回の講演は China Taipei Mountaineering Association=CTMA（中華民国健行登山会）と China Taipei Alpine Association=CTAA（中華民國山岳協会）の招聘によるものです。CTMA の副理事長でアジア山岳連盟 UAAA に関わる黄一元（Hank Hwang）さんが熱心にプロモートしてくれたお陰です。日本で言えば、CTMA は日本山岳協会（JMA）、CTAA は日本山岳会（JAC）に相当すると考えていいでしょ。

世界山岳医学大会 2012 ISMM には日本からも多くの医学関係者が来訪しました。メインスピーカーの中には京都大学教授 AACCK 会長の松林公蔵さんともう一人おられました。各セッションでお話をされる方々、その他参加者の中に多くの日本からの来訪者の名前がありました。増山茂さんの名前もありました。私にとって嬉しかったことは松林公蔵さん及び同じ AACCK 重鎮の医師、中島道郎さんに講演をお聞き頂いたことです。アメリカの友人の医師でユタ大学准教授の登山家（ヒマラヤの本出版・共著、JAC に寄贈）、George Rodway サンもスピーカーとして参加しました。

ショードを行いました。

台湾の山岳界はヒマラヤ登山では後発ですが、近年活発になり CTMA の中にヒマラヤ研究グループをつくり熱心に勉強を始めています。先駆者である日本のヒマラヤ登山の実績を調査研究し、将来への展望を描こうとしています。JAC 英文ジャーナル Japanese Alpine News にたいへん注目、評価してくれています。そういう流れに沿い、未踏査の領域に強く関心をもち、今回の招聘が実現しました。講演（2回とも英語）の後の質問は活発で多岐に亘りました。

世界山岳医学大会 2012 ISMM には新たな友人ができたことも大きな収穫でした。今後、台北の登山界とは交流が深まって行くでしょう。CTMA の President 陳慶章（Chen, Chin-Chang）理事長から台湾の山の豪華な本、全三巻を贈られましたので、JAC の図書室に送る手配をしました。

小生の講演のタイミングを 11 月上旬に選んだのは、台北で 11 月 3 ～ 6 日に開催された第 9 回世界山岳医学大会（The IX World Congress of the International Society for Mountain Medicine=2012 ISMM）の初日特別講演に小生の『ヒマラヤの東——最後の辺境・チベットのアルプス』をハイライトするためヒマラヤの本出版・共著、JAC に寄贈、George Rodway サンもスピーカーとして参加しました。

今回は欧米での講演のときは違う感じを

持ちましたが、充実した満足感を得ることができました。中国・成都在住の中国登山界の著名なクライマー、劉勇（Yao Liu 42 歳）さんが聴衆の中にいました。彼は昨年秋に四川の難峰・央莫龍（Yangmulong 6060 m）を米中合同隊のメンバーとして初登頂を果たしています。彼によると、私のヒマラヤの東の情報提供（英文ジャーナルその他を通じて）が中国で有名になっていると聞き驚きました。劉さんは英語が実際に流暢です。現在は四川大学の研究員です。次は K2 北面に挑むそうです。世界の登山界は広くないことをあらためて実感しました。

新たな友人ができたことも大きな収穫でした。今後、台北の登山界とは交流が深まって行くでしょう。CTMA の President 陳慶章（Chen, Chin-Chang）理事長から台湾の山の豪華な本、全三巻を贈られましたので、JAC の図書室に送る手配をしました。

三月会通信

■平成24年10月15日■

【出席者】 佐薙、上原、三井、竹中、佐藤（久）、
中村（雅）、金子、高崎（俊、記録）

▽ HUHACにも既に報告が掲載されていますが、9月中旬から約1ヶ月インド・ヒマラヤでトレッキング・バス旅行を楽しんで先週に帰国された佐藤（久）さん、中村（雅）さんが、日焼けして少し痩せたものの元気な顔を出してくれました。

▽ マナリはスリナガールと並んで、インドで有数の避暑地だそうです。最近はスリナガール方面の治安が少し悪くなってきてるので、マナリの人気が上がり、新婚旅行のメッカになつてているとの事。日本では軽井沢の様な大きな町になつているそうです。

▽ 佐薙さんが貴重な後立山からの「剣岳」の写真（『剣山の朝』吉田博作 1926（大正15年）と注記があります）のコピーを持参されました。石井さん・山崎さんと同年配で国立に在住のご友人（プロ級の写真家で、ピンホール写真機を自作される程の凝りようだそうです）から、「撮影した場所は何処なのか特定する依頼を受けられているそうです。三の窓雪渓・小窓雪渓の位置、斜面の方向、剣岳山頂との高度差、等を根拠に、種池ではない、冷池でもない、布引山ではないか、と言ふのが大勢の意見でした。

▽ 三井さんから（夏に崩した体調はかなり恢復した

ものの、万全ではない、との事ですが）、ヤマケイ文庫から出版された「トムラウン山の遭難は事故起きたか」の紹介がありました（これもHUHACにも掲載されています）。この事故は、ガイドの判断ミス、具体的には、3人のガイドが引率したもの、リーダーの存在は無く、それぞれがバラバラに判断して行動したのが大きな原因である。あの天候の下では、出発しない途中で引き返す、という判断をしなければならなかつた。そもそも、「ガイド」と言いながら、欧洲アルプスの国々の様な専門職としての資格も無く、ツアーや組織する会社の活動には疑問がある。トムラウン山は、縦走するにしても、往復するにしても、頂上付近（南沼）で一泊するのが良い。一日のラッシュには、12～13時間は必要で、十分な体力が要求される（最近の発行なので、書店には置いてあるはずです）。

▽ 烧酎には、「甲類」「乙類」の区別があつたが、今はどうか？ の話になりました。如水会館に置いてある高崎酒造の製品には「ハーフボトル」が無かつたので、止むを得ず、他社製のハーフボトルを試しましたが、これの表示は「乙類」でした。

▽ 最近TVで放映されましたが、富山湾から走り始めて剣岳から北アルプスに入り、中央アルプスを縦断して、仙丈岳から南アルプスに入り、畠蕪に下つて後、駿河湾まで走破するというのが「トラン」です。静かに山登りを楽しみたい、という登山者にとっては迷惑な話かも知れません。制限時間は8日間で、優勝者は5日と10時間強で走り切った、との事です。

▽ インド・ヒマラヤから帰つたお二人から、日本のシャワーレットの簡略版がインドで良く見られるようになった、との話でした。これに端を発して、中国はどうの、マレーシアではこうの、と世界トイレ事情談義になりました。市場に出て直

離が段々短くなつてきて、次回は世田谷区の北側一周を考えているが、全長15kmになつたそうですね。地下鉄「大江戸線」の上を歩くと30km、オーション会の街道歩きの標準は30km（最近は24・25kmに落ちてきた）だそうです。多摩川を羽村から河口まで歩くと50km、江戸時代に東海道を歩く平均は40km／日。ところで、東海道を江戸から下つて、富士山が左に見える所は、何処だか知つてゐるか？ の質問あり。「一番有名なのが、現在の富士市吉原、「左富士」の地名もある。

▽ 「身体髪膚これを父母に受くあえて毀傷せざるは孝の始めなり」（孝經）の話になりました。大まかに言うと、終戦時までに学校に通つていたが、まだだつたかによつて知つてゐる、聞いたことが無い、に分かれた様です。病氣とか怪我とかで手術を受けるのもこの範疇に入り、避けるに越したこと無い、というのが言い出した方の言い分です。何故この話題になつたかは、皆様のご推測に任せます。

ぐに仕入れた、有難かつた、日本の山のトイレ事

情が良くなつたのも「山の日」制定運動の一つの拠り所にもなつてゐる等々、話に花が咲きまし

た。

▽金子さんが最近、秦野から渋沢まで「渋沢丘陵」を歩いてきたとの事です。丹沢山塊を右に見て、左にはゴルフ場の先に相模湾を見て、なかなかの景観だった様です。舗装道路ばかりではない様ですが、住宅地・畑地の中も通るので、「ルートファインディング」が難しいかも知れません。

● 山行記録

上原 9／1 上成木→高水山→軍煙。高水山頂上にあるお寺の表参道。徒步3時間のコース。上成木は青梅から都バスで約30分。

竹中 9／1 大岳山（御岳平→茶湯峠→小屋）。東京多摩支部初心者登山教室の第3回実登。雷雨のため、避難小屋から戻る。

佐藤（久） 9／13～10／12 インドヒマラヤトレッキングとローカルバスの旅。

9／19～9／29 トス水河→サラウング峠→バラシグリ氷河。古稀トレッカーにとっては少々キツイトトレッキングであった。1981年にホワイトセールで遭難した学生3人の慰靈も兼ねて。10／1～10／7 スピティ→キナウル→シムラ→デリー。ボロバスで一日10時間近く乗るシンディー旅であったが、雄大な景観を楽しみ、退屈する事は無かつた。

中村（雅） 9／13～10／12 インド・ヒマラヤ旅行・ホワイトセールを巡る山旅。スピティ、バスク旅行観光（デリー、上海）ハードな山旅で疲れましたが、充実した旅でした。

三井 なし

佐羅 10／12 茅ヶ岳。同行者はオーション会館

木兄 なし

得の行く形で印刷にかかりそうです。

▽「15号」を学生・一般読者にも売るには、の話から大学構内の生協売店、国立駅前の「ロージナ」、

「邪宗門」とかに置かせて貰うのはどうか？ と

いう案が出ました。昔は良く行ったものだ、今もあるかな、に続き、上原さんから「ロージナには最近寄つたぞ。昭和28年に開業したそうだ」。

● 山行計画	
上原	10／12 茅ヶ岳。
高崎	なし
佐羅	10／12 茅ヶ岳。同行者はオーション会館
木兄	なし

■ 平成24年11月19日 ■

【出席者】 上原、三井、遠藤、本間、小島、佐藤（久）、

岡田、中村（雅）、宮武、高崎（俊）、記録）、

▽冒頭、遠藤さんから、如水会報の12月号に「箔と百名城」という題（趣旨）のエッセーを投稿しましたから、熟読玩味するように、との御指示がありました。（承知のことですが、「百名城」については遠藤さんは既にネット上にホームページを設けられて玄人裸足の文章を綴られています。近々発刊の会報にも投稿されていますので、これもお楽しみに。）

▽「針葉樹15号」の発行については、14号発行から長い時間が経過してしまったので、また、当事者（当該時期の現役部員）の協力を得るのが極めて難しかつたりで、編集にあたつている岡田さん、中村（雅）さんの苦労は一方ならぬものがあります。裏表紙の一橋山岳部の「バッジ」印刷もその一つで、遠藤さんのご協力を得て、何とか納

得の行く形で印刷にかかりそうです。

▽「15号」を学生・一般読者にも売るには、の話から大学構内の生協売店、国立駅前の「ロージナ」、

「邪宗門」とかに置かせて貰うのはどうか？ と

いう案が出ました。昔は良く行ったものだ、今もあるかな、に続き、上原さんから「ロージナには最近寄つたぞ。昭和28年に開業したそうだ」。

▽また上原さんからは、夜叉神峠周辺の登山道整備の一環として、奈良田温泉からドノコヤ峠を越えて桃の木鉱泉に至る旧道の整備も手掛けられなかいかの提案がありました。トンネル東口から高谷山に至る今回の整備事業の規模を考えると、とても手に負えないのではないか、というのがあらかたの印象ではなかつたかと思われます。

▽「月見の宴」は毎年一橋祭に合わせて開催していますが、今回は大学側の厳しい指示（学内での飲酒厳禁）で、盛り上がりに欠けた宴になつてしまつたようです。その昔、おでん屋さんの屋台を一台借り切つて大騒ぎした、等は夢のまた夢になつてしまつました。今後は、部室に集合してアルコール無しの一次会、外に出て二次会、というような形をとるしかないのかも知れません。昔は良かった。

▽三井さんから突然、「副会長を今年度限りで辞めたい」との話が出されました。理由は、75歳になつた、最近体調不良、家事手伝い・孫の世話で忙しい、など。上原さんからは、75歳を越えたらしくなるのは当たり前、「年の功」で頼まれごとも多くなるし、それが出来る様になるし、人生これから。この話は聞かなかつたことにしま

●山行記録

小島 10 / 17 西吾妻山（米沢から）

中村（雅） 11 / 4～5 奥多摩・秋川ぐるり

周山行。単独・古里の山巡り

11 / 4 五日市→金毘羅山→御岳山→大岳山→

御前山→避難小屋（泊）。御前山避難小屋は新しく立派（同宿：男1名十犬1匹）。

11 / 5 →月夜見山→轍口峠→三頭山→（笹尾根）→浅間峠→上川乗。時間切れ、スタミナ切れで浅間峠から下山

11 / 14 藤野→（柄谷尾根）→陣馬山→醍醐丸

↓市道山→刈寄山→今熊山→五日市。秋川ぐるり一周山行の続き、広徳寺で墓参り（父+母+姪）

上原 なし

佐藤（久） なし

宮武 なし

本間 11 / 8～9 箱根外輪山。会社OB会の山

行、好転に恵まれ大満足

11 / 8 乙女口→乙女峠→三国山→桃源台→元

箱根 11 / 9 元箱根→海の平→湖尻峠

高崎 11 / 10 トンネル東口→桧尾峠→高谷山

↓夜叉神峠→登山口。家内と「一橋ルート」小周回路を4時間弱。高谷山頂上から白根三山の景観が素晴らしい。夜叉神峠は混雑。

●山行計画

小島 11 / 25 懇親山行・大山
三井 11 / 25 同右（予定）
中村（雅） 12月中旬 権現山
本間 11 / 25 懇親山行・大山

■平成24年12月17日 ■

【出席者】 三井、竹中、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、高崎（俊、記録）

▽やはり「針葉樹15号」が皆さん的手元に届いた

直後だけあって、「15号」が話題の中心でした。体裁もどつしりとして、重量感もあり、表紙の写真も時宜を得ていて、中々の出来映えです。内容も、会員の中から「予想は嬉しく裏切られ、立派な内容に驚かされた」とのコメントもあつた様に

素晴らしいものに出来上がりました。メトロ会関係者、日本山岳会多摩支部関係者を中心に、お札状が届き始めた様です。中村（保）さんの記録・写真が好評を得ているのは当然として、カカボラジの記録も高い評価を得ているようです。この勢いを16号につなげたいものです。

▽編集に携わった会員から、次は「写真集」を作りたいという提案がありました。デジタル化の技術が大きく進歩したので、昔の（銀塩）写真を電子情報化しても見栄えは殆ど変わらない、ネガでもポジでも電子情報として保存できるそうです。「目で見る針葉樹会の歴史」（…）として後世に残したいものではあります。現役時代に写真を多く撮影された会員も沢山いらっしゃるので、これらをどう収集するかが課題です。時間的な余裕も無くなりつつありますので。

▽また、部室には「針葉樹」の復刻版も含めて8号・9号がありません。部室には全巻そろえて保管しておきたいものです。山本（健二郎）さんの蔵書の処理を任せられた様に、故人の蔵書をどうするか、頭を悩ましている遺族の方もいらっしゃるかも知れません。この中には、故人以外には価値があ

る可能性があるので、何とか回収する事を考えたいのです。但し、一部を譲り受けて、他を必要ありませんと引き取らないわけにも行かず、頭の痛い話ではあります。

▽この「針葉樹15号」が配達された日は、生憎の天気で、場所によつては雨が降っていた恐れがあります。雨の中の配達になつて、本が濡れてしまつたのではなかろうか、と編集担当者が心配しています。もし、このようなケースがあつたらお知らせ下さい。

▽レッドキックが販売停止となり、入手できない状況が続いているですが、塗り薬の代替品として「ボルタリングル」が、効能はレッドキックには及ばないかも知れないが使えるぞの話が出ました。

また、漢方の「芍薬甘草湯」も即効性があり、危ないところで助かつた、といった話もあります。

▽3井さんから「懇親山行」のあり方について問い合わせがありました。会員の登りたい山と、懇親山行で選定する山とにギャップがあるのでないか、日帰りを原則とするべきではないか、魅力的な個人山行の提案があると、そちらに流れてしまふ、参加者が限られて毎回同じ顔触れになつて、アダージオに集合する機会は継続したいが、等々。今後の大きな課題です。

▽学生（山岳部・部員が一挙に増えて、活動も定着してくる気配が出て来た。こうなると、OB会としてどうサポートするかも検討しなければならないが、とにかく学生との連絡が難しいのが現状です。学生担当の幹事に活躍してもらおう。

●山行記録
佐藤（久） 11 / 25 土山峠→辺室山→物見峠→

煤ヶ谷。4年前に遭難した会社の先輩の慰靈登山
竹中 11／15 牛の寝通り（石丸峠→小菅の湯）。
東京多摩支部平日山行に参加（22名）。盛りを過ぎた紅葉があつたが、それなりに楽しく歩けた。

11／25 針葉樹会懇親山行 大山。佐薙、本間、宮本、金子、岡田、竹中

12／10 街歩き（横浜三溪園→中華街）。如水

会町田支部歩こう会 中村（雅）なし

三井 なし 高崎 なし

中村（雅）なし

● 山行計画

竹中 12／20 多摩支部平日山行 浅間尾根
中村（雅） 12／28 岩瀬（水戸線）→雨引山→

加波山↓（自転車道）↓岩瀬。関東ふれあいの道。

藤原さんからのお誘い、年末トレーニング山行
1／3 後閑から三峰山（スノーシューダンジョン）。藤原さんからのお誘い

■会費納入のお願い

平成25年度の会費納入をお願いいたします。なお、昨年の総会で納入額が変更になりましたので、ご注意ください。

会費（普通会費）は卒業年次に關係なく、一律5000円です（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口1000円で、口数は任意です。今年は90周年事業を計画しておりますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

▽会費納入先の銀行口座

銀行：三菱東京UFJ銀行

赤坂支店

口座名：針葉樹会

口座番号：普通 4825647

*振込む際、摘要欄にお名前（卒年次）をご記入してください。

会計幹事 佐藤久尚

▼しばらく前から、また私は編集委員に名を連ねていますが、そなつからも実は申し訳なくも幽靈委員で、何をして来ませんでした。そもそも、昔から会報の編集には熱意を抱き、最初はまだ若年の頃に、針葉樹会が海外遠征を派遣しても当然な団体として相応しいような会報を作りたい、という願望をもつて何冊か手掛けました。その後も時々は、お世話になつた先輩方の追悼号を、他人任せでなく自分も加わつて完成させたい、という動機などで、時々編集委員にさせてもらいました。

この度の委員参加の背景は少し事情が違いました。最近の針葉樹会運営に異議を唱えたものの誰も耳を傾けないので、或いは今は何も活動に協力しないせいで仕方ないのか、では何か手伝うとしたら自分の主張を反映させることの出来る会報編集がいいだろう、という動機が背景にありました。その前に「一橋山岳部の軌跡」特集号を纏めていた機縁があり、その時は書き足らず心残りだった部分が残っていました。幾人かの先輩たちについて隠れた資料を発掘して、引き継がれて来た真っ当な山岳部精神といつたものに更に光を当てて見たい。そこで、第二弾歴史特集号を今度は編集委員として、皆の協力を仰ぎながらもう一冊纏めようと目論みました。毎号編集には参画せずとも、別に特集号専念委員が居てもいいだろう、と考えました。

しかしながら始めて見ると、前回の主に『針葉

樹』通巻に頼つた歴史号とは違つて、無いものを搜すのに時を費やすだけで、思惑は大幅に外れました。結局、そもそも多分存在しない資料を追い掛けたり会報には終始し、とても一冊特集を組む程の成果には至りません。まあここで決着を付けるしかな

い。

そこで今号にご覧のとおり、部分的に新資料を編纂して記録発表はする、纏める迄に漕ぎ着けられないものは、追跡頬本報告稿を掲載する、ことにしました。そうなつてしまふのは『針葉樹会報』に対する私の執念やエネルギーがどうやら燃え尽きたことを意味するのでしょうか。私にとって会報とは同時に、時々に目標を定めて実践して来た自己登山活動の趣旨を発表する媒体として不可欠のものでした。それが熱意や体力減退のせいで年数回の軽登山の類に留まり、既に山行記録などを寄稿する意味もありません。

そういうわけで最早私は会報に携わる資格もなく、今号で編集委員を辞退するしかないようです。最後の一言。『針葉樹会報』は、同窓会誌でもあります。若い層の会員たちがもと顔を出して盛り立てなければ、その本質を持続するのが難しい事情にあり、新しく情熱を抱く会員が現われて次の飛躍の段階に発展させることを期待します。

(倉知)

▼本会報は90周年の年の会報に相応しい内容のものになり嬉しく思っています。日江井先輩の大凡70年前の活動を、残された資料と数少ない関係者から丹念に追跡する倉知さんの姿に、一橋山岳部の繋がりを感じ、敬服する次第です。そして佐藤久尚さんの、ホワイトセールに向かつて山譜歌い

30年前の遭難時の教官を訪ね情報依頼する姿にやはり繋がりを感じ敬服しました。一橋山岳部の90年は繋がつていると実感しました。今後とも色々な会員原稿を集める努力をしたいと思います。(小島)

▼週末を奥多摩で過ごしていると、たびたびパトカーや消防車がサイレンを鳴らして走り回り、ときにはヘリも飛んできます。マスクミニ報道されない登山者の事故がいかに多いか実感します。かく言う私もワサビ田に行くそま道で積もつた雪に足を滑べらせ、危うく谷へ転げ落ちそうになりました。油断禁物です。

(井草)

▼自分の現役時代が含まれる「針葉樹15号」を、昨年、先輩方に編纂していただきました。申し訳なく、身の縮まる思いはありますが、それとともに感謝の気持ちでいっぱいです。人生のなかで特筆すべき大切な時期だったにもかかわらず、記録も記憶もないがしろにしていました。編集を生業としているのに灯台下暗しです。今号の倉知先輩の特集とそれにかける情熱にも、おおいに学びました。(川名)